

ミオヤの光

宗祖の皮髄

序説 玄談

- 一大意 二題號の略解 三安心起行の形式 四起行の要心と功果の内容
- 五宗祖の法語と道詠 六淨土の道しるべと道中の實驗 七宗祖の入信と爾後の證入
- 八靈格の核と種の播布

一、本講演の大意

謙んで惟みるに、我曹何の幸ひにか宗祖の如き靈的人格を備へ給へる大偉人の末裔として聖き血脈を相承し、清き吉水の流を汲むことを得たる。我等は宗祖の聖き生命靈的人格を欣慕して止まず。就ては宗祖の靈的人格の内容實質は云何なる要素を以て形成なされしか。云何に安心を立て云何に起行して憊る靈的人格に倣らひ得らるゝか宗祖の後裔として血脈を傳承せる我曹の日常は、宗祖に稟けたる靈的生命として生活せざれば何の面目かあらん。宗祖の靈的内容の豊富なる如く我らは信念を養ひ、宗

祖の靈的實質の克實する如く、我等は宗教心を克實せんことを期せざるべからず。

靈的人格とは、謂ゆる如是相、如是性、如是體、如是力、如是作等、此の何れの方面にも圓滿に具備せんことを要す。宗祖は内容が豊富にして且つ靈に充滿するが故に慈悲圓滿なる相貌表はれ、彌陀の聖意に靈化せられたる靈的性格備はれり。全體に亘りて靈的人格の圓滿なる、間然する處なき靈格は即ち上一朝より下萬民に至る迄に感動せしむる大威力あり。内靈に充實せる心意より動く處、三業の所作として悉く佛行ならざるはなし。蓋し宗祖は彌陀の聖意を以て意志とし、如來の慈悲を以て内容とし、彌陀の本願を以て願望とし、彌陀の人格が其のまゝ現じたる宗祖なると共に、宗祖は彌陀の應現なり。されば時人が「形を見れば法然房、實を思へば阿彌陀如來の應現か」と稱讚せしも宜なる哉。

靈的人格を形成するに就ての形式と内容と實質とを説明せば、安心は心意の形式を具へる者にて、起行は内容を克實せしむるもの也。宗教の安心と起行即ち形式と實質とは、之を佛像を鑄造するに例へば、安心を完全に備へるは鑄像の型式にして、起行は内容を充實する材料の如く、安心の誤謬なるは佛像の相好備はらざる如く、安心にして誤謬なければ佛像の相好能く備はるが如し。内容を充實せしむる材料とは金銀銅鐵等の如し。頭者、我宗祖の諸義を傳ふ布教者の説を類ふに、安心起行の説明に就て精を究め美を濟す如きは、實に歎するに餘りあり。然りと雖も、自ら信じ人を教へて信せしむるに宗祖の内容實質に倣ふて、實地に宗教的人格を養成するに忠實ならざる如きは、實に遺憾に耐えざる處、辨榮が不敏、固より如上の問題を云爲するの資に乏しと雖ども、宗祖の流を傳へし責任を負へば黙止するに忍びず。願くば賢明なる吾同侶衆よ、共に範を宗祖に軌り、宗教的人格の實質を形成せんことにとつとめ、自ら成して他に類ち、大悲普く衆に及ばされんことを欲す。聊か卑見を演て諸賢の參考に供す。若し少分たり共資料と爲るあらば、寔に幸甚の至りなり。是を本講演の大意とす。

二、題號の略解

本講を宗祖の皮髓と題したることは、我々が宗祖の血統を禀けて靈的人格の實質を形成せんに、同じ安心を定め、同じ起行を運ぶも、各其造詣する處の程度得道の淺深なきを得ず。本講は安心の形式よりは、功果の内容養成を目的と爲るを以て斯かる講題を簡べり。是れ達磨大師が其門下に對して、得道の深淺を品評したるに例せるものなり。達磨大師一日遽かに其徒に謂て曰く「我れ西遊の時至れり、汝ら宜しく各所詣を言へよ」と、時に道副曰く「我が所見の如くは文字を執せず、亦文字を離れずして而も道用を爲す」と。大師曰く「汝我皮を得たり」と。次に尼の總持の曰く「今我所解の如くば、慶喜が阿闍佛國を見ると同じく一度見て更に再び見ず」と。大師曰く「汝は我肉を得たり」と。次に道育曰く「四大本空五陰有に非ず、而も我が見る處一法の得べきなく、言語道斷心行處滅」と。大師曰く「汝我が骨を得たり」と。慧可は只前に趨み拜し已りて位に居る。大師曰く「汝我が髓をえたり」と。是に倣ふて見れば、我ら宗祖に血脈を禀けて安心起行を同じうするも、或は宗祖の皮に接するあり、或は骨に髓に觸るゝ者あらん。念佛三昧の起行の功果をして、其所詣の程度に隨て宗祖に觸れ、其分に應じて宗祖の人格に觸れ、是に初めて血統を受けたる資格を成就するなるべし。亦起行にして彌進む時は造詣する處益深きに到らん。此程度が頓て最後の試金石ともなる往生の日に、九品の階級と爲る所以ならん。故に吾らは安心を重んずると共に功果の内容を豊富にし、實質の充實を獎勵するものなり。依て講題を「宗祖の皮髓」と題したる所以なり。

三、安心起行の形式

我祖安心起行の要義を選擇集に選述し玉へり。然るに同集は諸の經釋より往生の要文を集め、一々御意見を以て批判を下し玉へども、此要文は自から咀嚼して形成し

五

四

玉ひしかども、安心起行の要領に至りては組織的に物し玉はざりしを以て、宗祖に咫尺せる門弟らは、各々自己の意見を加味し、心行の流義を立て自ら宗祖の正統と主張す。實に宗祖の如き大偉人の、完全圓滿なる宗教意識は、門人等が其全體を體得することは不可能なりならん。故に自己の色目鏡を以て見る時、各々獨り正流を得たりと謂へり。門下の中に或は一念義を唱ふあり、又多念義を主張するあり、就中、聖光、善慧、幸西等、各自の所見を以て各々一流を立てしは、恰も基督の門人が自己の見たる範圍に於て、基督を會解して四の福音書と成りしが如し。宗祖の門下に於ても聖光上人は、宗祖が盛んに宗義を擴張し玉へる時代に咫尺して、傳法せらるゝこと首尾八ヶ年、正しく祖意を傳承して其命脈を禀け、専ら專修の流義を宣傳せられ、殊に安心起行の事に就ては、努めて宗祖の流義を重んぜられたり。其筆録所々に散在せり、中に就て最も簡にして要を盡したるは授手印なり。其大意は下の如し。

六

一者行事、五種正行と正助二業

二者念佛行者必可具三心一事

三者具三足三心之人必可修三念門事

四者行三三心五念之法者必可具三四修法事

五者三種行儀事

釋曰我法然上人言拜見善導御釋源空日三心五念四修皆俱見南無阿彌陀佛也吾曹は鎮西國師を通じて宗祖の正統を禀くるを得べし。依て安心起行の形式は授手印を基礎とするものなり。

四、起行の用心と功果の内容

宗祖の法語には心行の様を示し玉へ共、起行の用心に就ては深く沙汰し給はず。然れども自行の激烈なる、寒夜尙ほ汗すと。故に宗祖は實修躬行、自業を以て行相を示し給へり。然して起行の用心に就ては二祖に傳授し玉ひしを以て、二祖國師は宗祖を

七

祖述して懇ろに起行の用心を示し玉ふ。

宗要十八 宗典十卷四十八頁般舟經自說往生の事。此大意を述べれば、欲生我國とは念佛三昧を以て阿彌陀佛國に生ずることをうべし、常に佛身相好具足し、光明徹照し、端正無比なるを想へとの文につきて、善導の深意此處にありと。念佛に名體と云ふことあり、名とは南無阿彌陀佛、體とは三十二相の體、佛體を見んと欲せば佛名を聞いて佛名を行じ、體を念じて見るべきなり。例せば人の名を呼べば直に其人の形を見るが如し。故に七日別時念佛すれば、七日間佛名を呼奉り、意には佛體を見奉らんと思ふなり、是れ念名念體なり。今般舟三昧經の念佛を善導の意を得給ふは、念體は彌陀の本願に非ず、念名こそ彌陀の本願と思ひ取て經の前後を見給ふに、我を念せよとは我名を念せよとの意を得給ふ。念名は本願なり阿彌陀經にも執持名號の文あり。今口稱名號の念佛行者の所期は見佛三昧を以て所期とすべし。其故は、口稱念佛の成就と不成就とは、三昧發得を以て現身念佛の成就と云ふ。成就とは見佛なり。之に依りて別時念佛と云は、南無阿彌陀佛と云ふ、稱名は是行なり、彌陀の本願也。佛の三十二相の姿を現し給ふことは、行者の志念するの所期なり。行者現身に三昧發得して證を取らんが爲に七日の別時念佛を始め、不淨を止め散亂をやめて清淨の心に住し、入定の方軌を以て心に思ふ所は餘念なく見佛せんと也、口には餘言なく南無阿彌陀佛を唱ふれば見佛するなり。

宗要四十九 宗典十卷別時念佛の事。問別時念佛とは如何なる機なるぞ。答ふ見佛三昧を期とするも、尋常にては遅く見る故に、疾く見奉らんが爲に別時を用うるなり。疾く見佛するは是見佛三昧の咽喉の爲に之を説く、尋常の機は是漸機なり。無想の時に見佛する。尋常の行者も念佛し居る程に無想と成りて佛見へ給ふ也。有想の時は佛を見奉らず。經に九十餘の勿と云ふはこれが爲なり。水靜なる時は月浮ぶ、風吹ば心不起して佛を見んと欲するも得ず。般若經に之を妄念と記したり。

宗要五十八 宗典十卷念佛三昧發得の事。これこそ念佛者の大切なる事よ。是をよく習

ふ可き事に候。一切の行は所期を思つめてこそ行ずれ、人ごとに何とも思はで念佛申すは悪き也、念佛三昧發得せんこそ所期なれ。宗要七十六 宗典十卷念佛行者の所期は是れ見佛三昧なり。故に見佛を本意と爲る。故に所期に約して進んで三昧といふ。

二祖は斯く懇ろに起行の用心を獎勵し玉ひしが、要は是の念佛を唐捐せずして内容實質を成就せしめんが爲なり。起行の用心は因にて功果の内容は果なり。用心ありて實修すれば其功果として見佛の益あり。已に見佛するに到れば自己の内容實質に於て變化し、心靈美化せられて實質が靈格と爲り、靈活々活の活きたる信仰となるなり。植物にても種子を播き下して栽培宜しきを得ば、竟には麗しき花を開き好き果を結ぶ即ち功果の實收あるが如し。信心の花開きて見佛の功果は靈的人格と現はるなり。

五、宗祖の法語と道詠

宗祖親しく道徳を勸めて念佛せしむるに、安心起行に就ては御傳和語燈錄等に繁く載せられたり。故に祖流を宣傳する傳道家が、安心起行の要文を掲げて、淨土の道しるべと爲るは甚だ好し。然れども宗祖の靈的内容の彌陀に靈化したる處の、最も美に最も靈き、大に味ふべき、甚だ樂しき靈に活きて、溫熱の血の循る處の、内容の方面を忘れらるゝは實に憾しき處、實に我祖の世に最も尊崇し、愛慕せらるゝ圓滿なる人格は、還て内容の豊富なる處に存するにあらずやと思ふ。然らば我祖が實行の功果として豊富なる内容より靈に満てる妙味を洩し給へる甘き汁をば、いかにせば靈に満き聖に飢うる輩に之を享受せしむることを得るか。是れぞ本講の目的とする我祖の内容を汲みとりて、共に味ひ共に活きんとする所たり。即ち我祖の内容を洩し玉へるものは道詠なりと云ふべし。いかにとなれば、一體歌と云ふものは自己の實感、自己の内容が自から詞に表はるゝものなり。彼の孔子が「詩三百一言覆之曰思無邪」と詩や歌は理窟にあらずして感情の表辭なり。三百篇の詩が何れにも通じたる所はた

と思無邪なり。邪なしとは自己の思ふまゝが詞に出たるにて、悲しいから悲いと歌ひ戀しいから戀しいと歌が表はるゝなり、即ち思ひのまゝ實感の其まゝにて邪なしと云ふ。今宗祖は寝ても起きてても、心に佛を念じ口に名を稱へ、久しく彌陀の靈光に薰染し、佛陀に同化したる内容は、即ち彌陀と一體なり「阿彌陀佛に染むる心の色に出でば、秋の梢の類ひならまし」と詠じ玉ひし如く、内感の餘韻が即ち詞に出でたるに外ならず。故に我祖の内容の消息を窺はんとするには、須らく道詠に洩し玉へる跡を便りて、其室に入らざるべからず。

いかに萬徳總攝の念佛にても、念佛が活きて働かざれば實際の味は感せられず。白隠禪師が云はれし、生鐵を嚼む如き隻手の音聲なれども、かみしめて味が出で來たれば捨て難しと。況や五劫思惟の選み出したる念佛三昧の妙味を彌陀と共に味ふに於てをや。詩歌は識るべきに非ずして味ふべき詞なり。此頃印度のタゴールが入朝して、名士の爲に歡迎さるゝのは、彼が歐洲に於て、英佛獨等の夥多の哲學者等の上に特に稱讃せらるゝ所以は、すべて在來の哲學者が宇宙の實體等を知識の對象として研究し説明したるに反し、彼は獨り趣を異にして、自然と自分とを同じく血の通ふ朋として甘く味ふ所にあり。故に説明するよりは寧ろ宇宙の妙味を歌ふにあり。すべて實感の味ひは説くよりも歌ふにあり。謂ふに大乘佛教の經典は、佛陀が自己内感の靈味を讃頌したる物ならんと信す。今宗祖の内容を窺ふに道詠に依違せざるべからずといふは全く此意味に外ならず。

六、淨土の道しるべと道中の實験

安心起行の法を能く意得るは淨土へ行くの道案内なり。本より道が不案内にて方角さへ分らぬ者が、目的の地に達せんとするは不可能なれば、特に淨土に通ずる道しるべの安心起行に就ては、確かに會得せざるべからざるなり。然れ共其道に入りて、幾年を経とも唯道しるべのみを聞き、未だ道に進み、歩々に向上し、念々に進趣せざ

れば何の詮やある。正に淨土の道に就くものは、其功果として道程の経験なかるべからず。喻へば京都より出發して東京に向ふ道中に於て、已に大津に迄到る人は大津迄を経験し、名古屋に迄達したる人は名古屋迄を経験しつらん。心靈界に於ける淨土の道中に就く人も、其心靈に於ける功果の程度丈けに何か経験なかるべからず。傳道家は衆くの信者を誘導して、淨土の途に就くところの案内者にあらずや。自から道中の處々の絶景、古聖の舊跡等を標榜し説明し、自から率ゐる信者をして、道中の勞を忘れ、樂しき道に進ましむるの職責にあるにあらずや、死後の淨土のみを稱讃しても、道中の慰藉なくば同行者の道中は無味にして耐へざる處ならん。

視よ、人生の一大事たる宗教に比ぶれば、要なき一閑事たる茶道や花道すらも之を習ふ者には、其技術の堂奥に達する階級として、初傳中傳又は奥傳等の、道中の名所舊跡に趣味を覺え、知らず／＼に進行するに非ずや。禪に於ける千七百の公案も、修道士をして誘導するの手段に外ならず。我祖流を傳ふる宗匠は、何故に道の爲に忠實に、衆を誘引するの手段を講せざるや。

七、宗祖の入信と爾後の證入

我祖が夙に出離の道に志を發し、平民的の福音に大なる必要あるを感じ、いかにせば容易く生死解脱の道を得つらんと腐心の結果、善導觀經の疏の「一心專念彌陀名號は、彼の佛願に順する故に」と云ふ處に於て、彌陀の願意を悟り、我等が解脱は此外に無しと、渡り船を得たる心地して、從來の所業を悉く捨て、専修念佛の一行に歸せられたり。爾後は行住坐臥に唯口稱の念佛を事とし、専ら彌陀の本願を仰がれ、永き功果は彌陀の光明に靈化し、靈的人格の高き、内容の豊饒なる、一休が法然活如來と讃せられし如き、實に我祖の皮肉骨髓一々皆靈ならざるはなし。是れ實に宗祖の尊き所以にして入信の宗祖が彌陀の本願を發見し給へる功は、實に歎するに餘りあるも、其時は未だ彌陀の光明に依て人格が靈化せられず、内容も靈に充たるに非ず。若

彌陀の靈を除き去らば祖位何處にかあらん。然るに我祖の主義を擴張する傳道家は、宗祖の入信當時の本願名號の眞理を發見したる分齊に於てのみ宗祖を世に宣傳し、内容實質の其味を乘に頌たざるは何ぞや。唯宗祖の皮膚のみを汲んで未だ髓に達せざるやと思ふ。願くは我祖意を主張する同侶の賢士よ、徹底したる信念を以て我祖の眞髓を自ら信じ、人にも教へ、宗祖の證入し給ひし御跡を慕ひ、宗祖と共に彌陀の妙味を感じ、皮肉より骨髓に迄通じて宗祖に習ふことを志さば豊快にあらすや。

八、靈格の核と種の傳播

凡そ有ゆる生物界を通じて、細草にまれ大樹にまれ、亦下は微菌より上は人類に至る迄、種子無くして生ずる物は無からん。元形質が原因となつて、大きな象とも成り小さな蚤ともなる。心靈の生命にも必ずや種子あり。種子あればまた核あり。然らば我曹の宗祖の靈格を敬慕して小法然と爲らんと欲せば、何んか是れ元形質なる。春日和氣に催されて咲く花の雄葉の花粉は、覆はしき香を放ちつゝ花の中心なる雌葉の中に入る。雄性の精子が雌性の卵房に入ればそこに胎子となる。夫が本となつて竟には果實となる。精子を受けぬ花は俗にムダ花と稱へ、花計りにて種子の功能なし。鶏の卵子に於ても雄性の元形質を受けざるものは雛子にならざるなり。但卵子は形のみにして生命なし。斯く卑近極まる喩を以て、無上最高の靈性に比するは勿體なきも一切衆生悉有佛性とて、皆佛になる核の半面は、本來具へる處の謂ゆる本有の種性なり。然れども新舊名言の種子を受けざれば活きたる靈胎とはなれざるなり。實を勉して云はゞ、念佛三昧の花の開く時に、如來は實感的に入精す。其靈妙不可思議の靈感が靈胎となるなり。吾人が如來の靈に觸れて、聖き自覺に聖き妙味を覺ゆることは、彼の元形質が我心の内に入りて、其種子より常に光明赫耀たる妙色の相好を感發するが如し。

例へばアマラ果が、花蕾の時には小さくて、外皮も青く味もなし。其時には種子の

核も熟さざる故に、たとへ之を播下すれども萌發せず。宗教心も夫と同じく、初めより信念の味は感得せられず。然るに花蕾の果實は確と枝に執まつて、風が吹け共雨が降れども離れず、寢めも寢めても彼は親木の養分を受け、いつの間にか實は大きくなり、外皮も脆はしく、順次に美しき色と成りし頃には、既に種子の核も熟したるなり。恰も我が信念の種子も、一心不亂執持名號にて、寢ても寢ても佛を憶念して離れざれば、樹の果實が枝と離れざる如く、念々に佛に執まつて、親と子と持ちつ持たれつ、離れの離れぬ關係と成て、何日となしに心靈が成熟し、而して宗祖の如くに、外貌も脆はしく、人格も大きく、内感の妙味も現はれて法悦の樂しみに充され、是に佛子たる靈核の熟するを見るべし。果實も未だ熟せざる途中に於て落ちしものは障害の爲に目的を失へり。然れども既に熟せし上に於て枝より離るゝのは土中に入りて種子より萌發して自分も第二の樹に成らんとする目的あり。我等も念佛三昧を以て慈悲の親の養分を受け、靈核の成熟するを業事成辨とも悉地を得たりとも名け、果實に喩ふれば、實が熟して第二の親木と成る丈の性分を備へし處なり、即ち熟せし靈の、肉體を離れ捨て、法性常樂の身になる資格を成じたるなり。我らは受けたる天資の大小に拘はらず、宗祖を標準として自己の人格を形成し、而してそれが自分のみならず、已に熟したる佛種子をも、世に廣く播布せられんことを希ふ。中山美枝子の人格に結びたる天理教の草の實は、僅か三十年間に全國に蔓延せり。宗祖の靈格に結びたる彌陀教の大樹は、比較的繁殖が徐々たりし。我等は我國民の心地に無量壽の種子を播布して、同じくは眞善微妙の花を開き、永遠の光に榮へる果實を結ばせんことを欲するなり。今宗祖の内容を窺ふべき道詠十首を選び、それに就て靈的人格の内容實質を形成したる我祖の種子を世に播布せんとす。

道詠 十首

- 一、あみだ佛と云より外は津の國の、難波の事もあしかりぬべし
- 二、往生は世に易けれど皆人の、誠の心なくてこそせね

- 三、我は唯佛にいつかあふひ草、心のつまにかけぬ日ぞなき
- 四、かりそめの色のゆかりの戀にだに、あふには身を惜みやはする
- 五、あみだ佛と心は西にうつせみの、もぬけはてたる聲ぞすゞしき
- 六、あみだ佛と申ばかりをつとめて、淨土の莊嚴見るぞうれしき
- 七、あみだ佛に染る心の色に出でば、秋の梢のたぐひならまし
- 八、月かげのいたらぬ里はなけれども、ながむる人の心にぞすむ
- 九、極樂へつとめてはやくいでたゞば、身のをはりにはまいりつきなん
- 十、生れてはまづ思ひいでん古里に、契りし友のふかき誠を

本 説

第一 永遠に輝く靈的人格

一、總 説

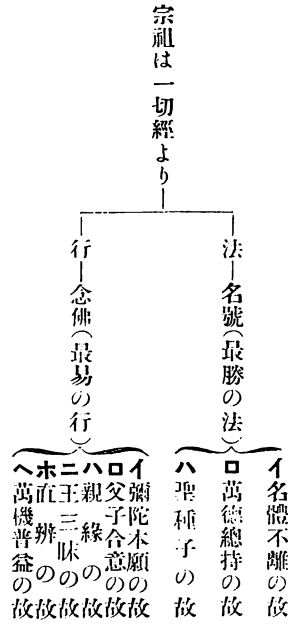
永遠に照り輝く、我祖の靈的人格を標準として、我曹は血脈を相承せる末裔の本分たる自己の人格を形成せんことを期す。さて皮髓とは、宗祖を學ぶ修行の功果として、得道の淺深なる階級とも見るべく、又一面よりは人の身體を形成する皮肉骨髓の四部に例して、靈的人格を形成する精神上の四分類なり。又感覺と感情と知力と意との受持を殊にする部分とも云ふことを得べし。靈的諸脈を受くる我らは宗祖のそれを各部に共に習はざるべからず。身體を形成するには皮肉等の四部具備すべきが如く、精神に於ても四部に亘りて全備せんことを要す。若し夫れ宗教が感情に入り、偏して意志の信仰に缺くる時は、恰も肉は豐富なれ其骨が不健全なる如く、何れにても一方に

のみ偏するは病的なり。我祖の信仰の完全なる如く、我らも亦完全たらんことを期せざるべからず。完全なる修養は知情意共に彌陀に同化せらる。之を總括する者は靈我にして、靈我の人格即ち靈格なり。若し肉體の方より檢すれば、元來宗祖と普通の人類とは異なる所なし。身體を構造する要素に於ても、また構成の形式に於ても、解剖學上はた生理學上に於ても異點を見出さざるべし。然れ共宗教的意識の全部に於ては全く大に異なれり。此宗教的精神に於ける我らは、宗祖の靈的實質を形成せし如くに習はざるべからず。實に宗祖の人格は完全且つ美麗にて間然する處あらざるなり。是れ正しく其内容は彌陀の光明に依て成熟したる阿摩羅果なればなり。果物も已に成熟する曉には、外皮も麗はしく肉も美味に、種子も熟する如く、宗祖の靈的人格の立派なることは一見自から威にうたる、如く、また溫容欣慕に耐へざる如く、精神の中なる感情も彌陀に美化し、豊富にして微妙なる法喜禪悅の妙味を感じつゝあるが如し。又意志の骨の剛毅なること金剛の如くにして、南都北嶺の大衆の迫害に泰然として動かざるが如き、實に彌陀に靈化せられたる、我祖の人格の圓滿なる如きは、他に比例を見ざる所なり。斯の如き超人的靈格を形成せしめたる者は念佛三昧なり。是れに依て圓熟したる知情意は共に靈的なり。宗祖の靈的要素は彌陀の光明によりて靈化し玉ひしなり。然れば彌陀を離れて宗祖の實質を形成せし要素は見出す能はず。宗祖は吾等の爲に靈的實質を形成する一大要素を見出さんとて、永年に亘りて腐心せられたりき。宗教は人の信仰と如來の光明とに依て成立す。衆生に本來佛性なければ宗教何の要もなし、人に佛性あり、煩惱に覆はれて顯現すること能はず。縱令佛性は具すれども、卵中の鶏の如く之を孵化するに非ざれば靈性も活動すること能はざるなり。人の信仰と如來の靈力とに依て靈性は顯るるなり。靈性を顯はして佛に成るのが佛教の目的なれば、宗祖の内容を洩し玉へる道詠に就て今衆生の心田に佛種子を播下するものを撰ばん。

一、選擇の道詠

(i) 法と行とに就て

阿彌陀佛と云ふより外は津の國の難波の事もあしかりぬべし



我祖が開宗の標準は他宗の祖師と趣を異にす。傳教大師の台宗に於ける、弘法大師の密宗に於ける、何れも入唐して有縁の宗師に就て傳法相承し、歸朝の後其宗を弘められしが、我祖は選擇的主義を以て開宗せられたり。宗祖の選擇の目標とし給ひしは法と行とにあり、法は一切經中にて最勝最上を選び、行は一切行の中に至身至簡を選び給ふ。故に他師の開宗の年齢に比すれば最も晩年に開宗されたり。宗祖は疾くに出離の志を發し、衆多と共に平等の慈の下に得度せんと念願にて、二十五年間一代の經及び一切の章疏に至る迄、悉く研究し比較し、非常なる苦心の結果、漸く導師の觀經の疏、一心專念乃至順彼佛願故の文に端緒を開き、念佛に過ぎたる行なきことを確めて專修一行の宗を開き、後に選擇本願念佛集を述て其意を明し給へり。

(イ) 法之最勝なることを述ふるに三義あり。即ち

(イ) 名體不離の故…(ロ) 萬德總持の故…(ハ) 聖種子の故…

(イ) 名體不離 談義に「至極大乘ノ意ハ體ノ外ニ名ナク名ノ外ニ體ナシ」と、彌陀の萬德悉く名號に攝在する故に、名號を稱へる時自然に萬德具はるなり。又名を稱す

れば如來の德が自然と彰はる。二祖は之を喩を以て述べられたり。「譬へば人の名を呼べば其人を思ひ出す如く、彌陀の名を呼べば直に彌陀を思ふ」と。例せば太陽と云はば名に就て太陽を思ふが如く、彌陀の名を號ぶ時即ち彌陀を思ふ。さればとて口に名を稱するも意が彌陀に相應せざれば體を離れたる名にして實はなきなり。

(ロ) 萬德總持 選擇集に「彌陀一佛ニ所有四智三身十力乃至一切内證外用ノ功德悉ク名號ノ中ニ攝在ス」と委しくは集の如し。他師の説なれ共弘法大師は經を引て「阿字十方三世佛、彌字一切諸菩薩、陀字八萬諸聖教、皆是阿彌陀佛」と釋し、又源信僧都は、阿彌陀の三字を法報應の三身、空假中の三觀、法般解の三德等に配せり。名號は萬德悉く總持するが既に最勝たり。

(ハ) 聖種子 此事は後に説明す。

(ろ) 行に就て念佛を選ぶに、今暫らく念佛が餘行より彌陀に親しき種々の義あることを挙げば六義あり。即ち

(イ) 彌陀本願の故…(ロ) 父子合意の故…(ニ) 王三昧の故…(ホ) 直辨の故…(ヘ) 萬機普益の故…

(イ) 彌陀本願の故 導師の一心專念乃至順彼佛願故の文、是れ宗祖が諸行の中に選んで念佛に歸し給ひし所以。

(ロ) 父子合意の故 佛は是れ大慈父、我等は其の子なり。父が子に對し、子が父に對し、一心に念佛すれば必ず父子合意契合して、直調をうることを念佛に過ぎたるはなし。

(ハ) 親縁の故 導師の「衆生行を起し、口に佛を稱すれば佛之を開き給ひ乃至意に佛を念すれば佛便ち之を知り給ひ、衆生佛を憶念すれば佛も衆生を憶念し給ふ、彼此の三業相離れず故に親縁と名く」と。世間にも親子名を呼び交すは最も親みを深密にす。導師が「偏に念佛の衆生を攝す」と云ふは極めて親密の語なり。

(ニ) 王三昧の故 佛法に無量の三昧門あり。中に就て念佛三昧の王たる所以は、他

し。三世諸佛悉く念佛三昧にて最正覺を成せり」と般若論に明せり。

(ホ)直辨の故に往生要集に明せり。「他の一切の行は往生の爲にと同向せざれば往生の業とならず。念佛はもと往生の行の故に別に同向せず其直に辨する故に」

(ハ)萬機普益の故に「念佛は一切の老少男女共に、行住坐臥時處諸縁を嫌はずして行することを得、最も修し易きが故に、萬機を攝す。」

ハ、名號は聖種子の故に(二十六頁ヨリ來ル)

問ふ、佛教にて佛種子と云ふことは、佛性と共に本有なるか、將に新薰なるか。法華等にも「佛種は縁より生ず」と説けり云何。答ふ、唯識等に依れば種子に本有と新薰とあり。本有種子は佛性にて衆生法爾として具す。新薰は名言薰習即ち名言の種子が八識中に伏在して、自體果を生ずる能力なり。色心が萬法を現象する生産の起元作用の力、例へば植物の種子に生産の起元作用ある如く、生物の元形質が種子の細胞に入りて種子と爲り、一切の枝葉根莖等が偈込式に伏在して縁を待ち、漸々に發展し顯現する如くに、聖種子の名號が衆生の佛性に薰じて、その元形質に一切萬徳が偈込式に伏藏して、頓て圓滿に成熟するに及びては、諸佛の果位に至るの徳を具するなり。佛種子とは元照云く、「問四字の名號は凡下常に聞く、何の勝能ありてか衆善に超過せるや。答佛身は相に非ず果徳は深高なり。嘉名を立てずば妙體を彰はすこと莫し。十方三世の諸佛皆異名あり。況や我が彌陀は名を以て物を攝す。是を以て耳に聞き口に誦すれば無邊の聖徳識心に攪入し、永く佛種と爲り、頓に億劫の重罪を除き無上菩提を獲得す」と、人の本有の性は無定性にて而も一切の種子を薰習する性能あり。若し基督と云宗教的元形質が薰染すればクリスチャンと爲る、若しマホメットの元形質が入ればマホメットが種子と爲る。今は衆生の佛性に阿彌陀佛の聖元形質が播下して頓て佛子の面目を顯はす。即ち宗祖はた教祖の如き靈格と爲るのも種子にして、是我祖が佛教中に最勝最上の聖種子を選びたる所以なりとす。

(2) 衆生の至誠心に就て

往生は世に易けれど皆人の、誠の心なくてこそせぬ

(イ)往易き所以(ロ)至誠と虚假(ハ)彌陀は至誠を撰取す(ニ)至誠は内容を要す(ホ)至誠の三階(ヘ)天性的の至誠(ト)理性的至誠(チ)靈性的至誠

(イ)往易き所以(ロ)至誠は本來彌陀と衆生との根本的の因縁に依て、自然に合致すべき性なり。彌陀は自性の本體を以て我とし、衆生もと自性を根底としながら、迷妄虚假を我と謂ふて六道に流轉す。眞實を體とする父と、虚妄を我とする衆生とは、暫らく父子相背くに似たれども、虚妄我の奥底に潜める本心は、如來の聖意と同性相吸引するの勢能を有するを以て、實には本覺の父の許に往き易し。然るに衆生一たび本覺に背き、虚妄我に執はれ、虚妄虚偽自から非なるを覺知せざるを以て往く人少なし。大師が「念佛して往生するは法爾の理なり」との給ひしも、彌陀と衆生との本心に本來合致すべき性を有すればなり。

(ロ)至誠と虚假(ニ)至誠と虚假との二性を具有す。此を佛教にては佛性と煩惱と云ひ、儒教にては道心と人心と云ひ、基督教にては靈と肉との心と云ふ。俗に云ふ本心と形氣の心なり。至誠は眞實心にて衆生本有の佛性、俗に云ふ天より稟けたる性なり。虚假は煩惱、即ち人慾の私より生じたる迷妄なり。至誠は例へば純粹なる水の如し、虚假は心水に混する有毒菌の如し。地中の深き底より湧き出づる水は混濁物少なけれども、地殼に近き處の水は種々の汚物混じて、中には種々の微菌を含有するやも知れず。人の天性は水の如く、人慾の私より虚偽を生ず。虚偽は肉慾我慾の動機より名譽利慾の念を生じ、其利害上種々の事情を生じて、恰も有毒菌の如し。此微菌が心水の中に生活する時は、すべての罪惡苦惱及び禍害を起す、是れ一切心の病源なり。衆生天性の心水中には虚偽の有毒菌を發生す、是れ煩惱なり。この中に種々の毒種あり、謂く忿恨殺惱嫉妬等の類、これらの働きは即ち災禍に惱ましめ、世々流轉の業を造る種子を覆す。人の心水を清めて純正澄淨なれば眞實心なり。この眞實を根底として佛の萬徳一切の善根を充たしむれば成佛す。至誠より生ずる功德にあら

されば終局の功果を望み難し。一の心が虚假雜毒を基礎として煩惱より業を造り、業に依て苦を受け、竟に解脱の期あるべからず。至誠を根底として菩提心を起す者は佛心なれば、佛子佛行の歸する處必ず無上正覺を成すべし。

(八)彌陀は至誠を選取す一切諸佛の智慧と慈悲とを集め給ひし處の彌陀は悉く一切衆生を攝取して佛道を成就せしめんとす。爲に選擇攝取の法を以て本願となし給ふ。選擇攝取とは何ぞや。曰く有ゆる一切國土の中の衆を捨てて妙を撰び、衆生の中の惡を捨て善を取り給ふ。要を取て云へば、一切の無明迷妄虚偽邪惡苦澁害毒等の一切の惡をば悉く捨て、而して眞善微妙光明等の一切の善なることは悉く撰び取り、至眞至妙の淨佛國土を顯はし、而して闇黒の惑業苦の中に迷へる衆生を攝取して、清淨光明の方面に轉住せしめんと目的なり。一切の惡業を捨て一切の善業を撰び取る、之を選取と云ふ。かくして顯はれたる勝世界を淨佛國土と爲す。然るに選擇より顯はし給ひし淨土には、いかにして往生するや。曰く是れ亦選擇の法に由らざるべからず。然らば何者をか捨て何者をか撰取するや。曰く往生を樂ふに虚假心は捨られ眞實心は撰び取らるゝなり。其撰取されたる者が眞善美の選擇の淨土に生れ、捨られし人は捨られし者の危惡の方にして、永く迷はざるべからざる譯なり。現在の心が已に眞實心となれるところの人は、撰ばれて彌陀心光中に在て歩々向上し、虚假の人は肉の闇黒に惑ひて、焦つて惡道に墮ち行くなり。

(二)至誠は内容を要す至誠心は純粹なる天真なる心なり。之は純粹なる水に類すべきもの、清淨なれども至誠心の自性は形式なり。例へば純なる水の淡泊は無色無味無臭なる如く、此に覆はしき香を放ちて咽喉を悦ばす甘露の味の如き飲料に爲んには、それに調合する美味と香料とを要す。誠は最も鞏固なる根底なり、此根底の上に建設したる建築物は傾倒の憂あることなし。誠は形式にて必ず内容を要すべし。彼の如來の本願に「至心信樂欲生我國、乃至十念若不生者不取正覺」と。然れば誠を充實せしむる内容は、彌陀の聖意に相應する信、愛、欲、是れなり。曰く至心に如來を信じ、

至心に如來を愛し、至心に淨土へ生れんと欲するなり。誠の本體は如來の法身にして衆生は法身の一分なり。奥底には大法身と連なれる法身なる誠の性を有す。信と愛と欲との内容を充實せしむるは、報身佛の智慧慈悲等の本願力なり。人は誠の性を具有すれども、天然素朴の間は未だ光りを顯さず。誠即ち眞實心が全く顯現するは自性天真我として、如來の形式の上に於て一致する時なり。然れども内容を充實せざれば萬徳圓滿なる佛と成ること能はず。それを充實せしむるは信、愛、欲の信仰と如來の本願力とに依るなり。

眞實と虚假とは、例へば果實の類に於ける種子が全く熟して、生産作用を生ずるに至れば、誠の内容も充實し全く種子の資格を具ふ。人も佛の子として至誠の上に信樂欲生の心を以て念佛し、業事成辦する時は果實の成熟したる如く、聖きに生きたる生産作用の功熟したるなり。唯虚假の皮殻のみにて核なくんば種子の功を認むこと能はざるなり。

(ホ)至誠の三階人の精神發達の程度を三階に分つて至誠開發の順序を明せば、人の精神と云ふ心に程度あり。迷も悟も善も惡も皆な心より出づ。佛敎の一心十界説の如く、地獄畜生と成るも人天となるも、又聲聞や菩薩となるも心を本とし、心の發達の程度より別るゝなり。骨相學等に於ては、頭腦を三位にして心の座所を説明す。其頭腦精神の三階説も全體を信すること能はざるも、唯且らく便利上精神發達の程度の説明に轉用せば、頭腦の三階とは、一、天性、二、理性、三、靈性はなり。

眼と耳との位置より下部を天性とし、眼と額の中位迄とを理性とし、額より上部を靈性とす。天性は人と動物との共通性。理性は人類のみの特性、靈性は神人合一性なり。

(ハ)天性的の至誠是は天然生理的の心理作用を爲す部分にて、眼を以て視耳に聴き鼻に嗅ぎ、舌に味ひ身に觸れて感覺的作用を爲すは、人類も他の動物も共通なり。寧ろ彼等動物の方が遙かに發達したる趣あり。或獸類は聞きに視、また遠方の音響を聞

き、殊に嗅覺の敏捷なる如きは、逆も人の及ぶ處にあらす。又口の働きに於ても口自
 ら料理し、又彼らの戦闘には牙齒の武器を天然に具有す。之より考ふるも唯肉體と及
 び天性の五官の如きは、其發達の程度到底人間の及ぶ所にあらす。

(ト) 理性的の至誠 眼より額の中部迄を理性とせば、人間は他の動物より殊に此部分
 の發達し居るを見る。人類が高等動物に比較して肉體機關の輕弱なるに拘はらず、他
 動物を制伏して最高の位置を占むる所以は、精神と理性とが特殊に發達し居るに依る
 なり。理性は自然界の一切の理を認識し辨別し考察し工夫し推理す。是れを有するも
 のは人間にのみの特長なり。彼の理化を應用して蒸氣や電氣を發明し、又是れをすべ
 ての器械にも應用し得るに至りしは、悉く理性より發明されしに非ずや。又天文地理
 等の自然現象の事物を理解し、百科の學說を立て、萬物の原理を思辨し、判斷し觀察
 して哲學等を弄び、又一方には常識を以て我と人との社交を爲し、道德倫理を以て秩
 序を整へ、または法律を以て人の義務や權利を正しくす、是れ皆理性ある人類にして
 初めて行はる。倫理と云も人間が高等なる理性を以て自己の肉體の動物慾を制し、道
 として守らざるべからざる自己の行爲として規定するが如き人類には赫々たる理性の
 光を以て動物を制伏す。去り乍ら人間とても理性を濫用し濫したる曉には、天性の人
 や動物よりも遙かに悪しき且つ恐ろしき働らきを爲すことあり。

誠は天命の性として人類に具有すれども、意識的に判然と外面へ顯はれず。其性の
 作す處も誠に契ふ事と契はざる事とあり。縱令現に悪き働らきを爲さずとも、因縁に
 隨て悪き方へ發達することを妨げず。已に理性の働きの中には、虚假と眞實との兩
 面に意識を働かし、理性自ら悪き事を爲せども、他人の前には隠蔽す。理性に是れ虚
 假詐偽の働きある所以。至誠の本體は靈性なり。たとへ具有すれ共開發せざれば顯は
 すこと能はず。宗教の目的は斯の靈性の開發にあり。いかに學問上佛教に明るく説明
 は巧みなるも、そは理性に於て教理を理解するに過ぎず。自然界の一切の事物を識り
 得らるゝは、科學の範圍に於ける理性の働きなり。佛教の目的の對象は心靈界の區域

にあり。故に靈性を開く心眼なくんば之を知見すること能はず。極樂は西方に在りと
 説けるも自然界の中に之を發見すること能はず。實に心靈界は肉眼を以て見る範圍に
 非ざれども、心眼を開けば必ずしも見られざるに非ず。すべて佛陀の實驗の説より成
 れる大乘教の淨佛國土の如きは、靈界なれども心眼を以てすれば見得べきなり。何程
 理性の知識を研くとも靈性の實修なければ、如來所説の佛身佛土を觀見すること不
 可能なり。

若し理性の學識を以て靈界の眞理を經驗し得るならば、教祖釋尊は太子の當時有仰
 る天下の學者を集めて、學問の上に眞理を實驗すべき方法を講せられしならんに、而
 も人間の知識も學問も技藝も財寶も、乃至一切を悉く棄捐して山に入りて道を學ぶる
 こと六年、修行を終り豁然大悟の曉は無上正覺を得て、靈界の全部を正しく實驗なさ
 れし如きは、靈性開けて見れば宇宙全體、無量光明世界なることを知る。焉に到りて
 從來を省みれば無明の闇深く生死の夢を食ばりつゝありしを嘆せむ。自から目醒めて
 而して後世の中の迷の夢に醒めざる人を見る時、實に哀れ不惑と嘆せざるを得ぬ。然
 らば此夢中の人を覺醒せしむるには如何せん。寧ろ諸佛と共に常樂世界に安住するに
 如じと思はれしも、一步進んで觀すれば、一切衆生の生死迷夢の中にも靈性は失はず
 之を開く時は諸佛と異なること無し。いざ是よりは一切衆生を度せん哉と夫より教化の
 途に出で給ふ。我宗祖、夙に一切の聖經を學び、深く佛教の奥底を究めしも、是は是
 れ唯學解の分齊にして未だ證入の門にあらすと、永年苦心の結果專修念佛の一行を撰
 び、こゝに權門の方便を出で、直入眞實の行に入り給ふ。教祖及び宗祖、ともに理性
 に於ては出離の道を得ること能はざるを悟り、専ら靈性を開くの道に就き給へり。さ
 ればこそ靈に活たる導師として、迷妄黑闇の燈明として衆生を靈界に誘導するを得給
 ひしなり。

然るに動物の如きはこの理性に於て缺くる處あるを以て、善惡共に區別することを
 得ざるを以て、意識的の虚假あることなければ法律上道徳上善惡の責任なし。唯理

性ある人間にして虚實善惡の責任を負ふものとす。

四〇

(子)靈性的至誠—靈性は人類精神中最高位の部に屬す。如來の靈を感じ佛知見に依て啓示せらるゝのは此性なり。佛弟子及び菩薩佛等が最勝の靈たる所以は、此性能の能く發達して働らくが爲なり。斯の性は無限の大靈に接觸し靈界の清淨微妙を感受し、如來の相好色身を觀じ、淨土の衆寶莊嚴等を見る機關なり。教祖世尊が菩提樹下の金剛座上にて朗然として大悟せられしは、斯の性が圓滿に開發あらせられしを云ふのみ。キリストがヨルダン河の上にて聖靈を感じたるも斯の性が開けたることを意味するものなり。

心靈界の太陽と仰ぐ無量光如來の光が、淨滿月に反映したる釋尊の正覺は、斯の性に於てす。教祖は此靈光を以て一切の人類を導きて永遠の光明に入らしめ玉へり。永恒の大靈光は常に照臨し給へども、靈性未だ開けざる人は、之に感觸すること能はず。日光常に照せども盲人は見るべからざるが如し。併し前に述べたる天性の人は、誠と云も未定にて、理性の人は意識的に理が判る丈け眞實も爲し、また虚假をも爲す靈性の人は純誠にして虚假なることなし。予は至誠の體を顯はす爲に斯く區別したるも、天性と理性との人は往生不可と云ふには非ず。たとへ殊に天性と雖も靈性伏在して至誠なきにあらず。天性の人と雖も信仰に入て光明に接せば靈性開くことを得、況や理性を開きし人に於てをや。

至誠の體は靈性に依りて顯はる、此靈性の内容を充實せしめ、實質を形成せんには如來を信じ如來を愛し、淨き靈國に生せんと欲する、信と愛と欲とを以て、至誠の内容を充實せしむべし。

四一

大正十五年六月廿五日印刷
同 廿五日發行
誌代年七冊一圓二十錢(郵稅共)
年十二冊二圓(郵稅共)
編輯兼 山崎 辨成
發行人 東京市小石川區荻谷町九八
印刷人 小林 七太郎
發行所 東京市小石川區水道橋二ノ四四
ミオヤのひかり社
振替東京六八五一番

(3) 如来を愛樂するに就て

我は唯佛にいつかあふひ草、心の妻に繋けぬ日ぞなき
荷初の色のゆかりの戀にだに、退ふには身をも惜みやはする

- (イ) 宗教の中心真髓……(ロ) 信と愛……(ハ) 愛はいかにして發達するや
……(ニ) 甚麼して憐戀しい……(ホ) 母子相憶ふ……(ヘ) 異性の愛に例す
……(甲) 道詠は肉を以て靈に況す……(乙) 感情發達の順序……(ト) 愛の
三階……(チ) 愛の目的……(リ) 如来の慕はしさに……(ヌ) 彌陀を愛する
は道德の源……(ル) 彌陀を愛するは美の極み……(ヲ) 同棲の要求……
(ワ) 佛を慕ふ今古の偉人……(カ) 如来の麗はしき相好は愛の表はれ……
(ヨ) 如来を慕ふ賢聖……

(イ) 宗教の中心真髓は精神中の生命と云はるゝ感情に在りてせば、其感情の中に於て我と彼とを全く同一視し、佛に對して最も尊崇し乍ら、佛と我とを一體的に觀念なきしむる物は感情の愛なり。宗教的感情の愛ほど不思議なる物はなし。いかにとなれば、世に如来ほど尊ときものはなしと、絶對的に崇とみ高き限りなき迄に尊と恭敬しながら、親しき近き自分を放すこと能はざる迄に親近せる實感なればなり。實に如来は神聖にして侵すべからざる一切に超え給へる獨尊として衷心に信じ乍ら、恐れもなく憚りもなく寢間に寢乍ら心の懷中に抱き、親子の間に於て明し兼ねたる胸の奥まで打明て語る。さらば輕蔑するかと云へば決して然らず。寧ろ眞實に尊敬するなり。それを何故然るやと問へども答ふる能はず。それに親密の親子の情ありて、割ることも離るゝことも不可能なる仲とや云はむ。されど世の中には斯の如き不可思議なる感情の能力を、一向に經驗せざる人も多からんと思ふ。

さて愛と云ものは彼と我とを同じ様に憶はしめる處に價值を有すと雖も、世には極

端なる利己主義を主張する者ありて謂へらく、すべての生物は本能的に利己主義にして、己を愛することを外にして他を愛するは本能に反すと云ふ。之を吾人に謂はしむれば、蓋し極端なる利己主義なり。人類已下の動物は暫らく措いて、荷くも高等に進みたる人類てふ精神的生物に至つては、感情は理性の光に照されて一種の温情と愛情とを存す。愛は我と他とを同一視して、彼が憂苦し己が憂苦し、他の喜樂を我が喜樂として感じ、自他を以て異身同體の如くに利害苦樂を共鳴するものは愛なり。故に愛は情を以て我と彼との間を親密に繋ぐ所の情緒なり。普通此情の最も強きものは親子との間に於て見ることを得。又相憶ひ合ふ異性の間にも現はるゝなり。生理的自然として愛の最も深きものは母と子との間なり。兩者は温かなる血を以てより合ひ愛といふ情の糸を以て繋ぎ合ふ。また世には兩者の間を親密にして、水も洩らさぬ計りに濃かに繋ぎて温血の通ひつゝあるは、相愛し合ふ異性同士の間に行はるゝ愛なり。然れどもこの異性の間に繋ぎ合ふ愛は、生理的肉より發する或る幻の如き恐ろしき力なり。尙之等より一層微妙にして深遠なる、最も靈妙に最も高尚にして、而も神秘的に彼と我との間を親密に最も強く最も堅く結び合ふて離るゝことなきものは、如来と我との間を繋ぐ宗教的感情の中心靈の愛なりとす。

神人合一とか、生佛一致とか、又は大我小我の冥合等は、大なる愛と小なる愛との繋合の力なり。實に本心に彼を愛して其絶頂に達する時は、自己の心全體は偏に彼を憶ふ念のみと成り、愛者を念ふ心の餘裕は毫も見出す能はざるに至る。それ佛を餘念なく念ふ所より我が心全體が佛と成る。然る時に佛の方よりも亦此方を愛念し玉ふ心より外なからむと思ふ。宗祖が如来を愛慕し玉ふ感情の、いかに切なるかは二首の道詠に溢れつゝあるを見る。

(ロ) 信と愛「佛法の大海には信を以て能入と爲す」と經に示されて、信は全く如来

の實在を信じ、アナタは我等が慈悲の父と信するより、一心のすべてを獻げて歸命信頼することを得。信より進み入りて感情の眞髓に、アナタは我が有、我はアナタの有と親みの深き愛と爲りて、我はすべてに超て、アナタを愛すと叫ぶ時に、親と子との間に靈き血を通はすなり。故にアナタは我が父なりと信するも未だ以て活きたる信仰とは言ふべからず。如來を全く我有として感情的に愛慕憶念して、常に心の妻に繋け捨てんと欲するも捨ること能はず。宗祖の「我は唯佛にいつかあふひ草」唯は餘念なく逃ひたさに戀焦れをることにて、アナタを信する心はいかにも清けれど温情うすく、アナタを愛すと云に及んで何とも言に云はれぬ親しみとなるなり。喩へば爰に二人の子を有てる母ありとせよ、二人の子等が共に彼は我母なりと云ことを信じて疑はざれども、一人は深く母を愛して片時も忘れず、一人は少しも親しみおもひの情なし。母は此二人の子の中に何れを頼母しくおもふ哉と云はゞ、母を愛する方を末頼母しく思ふは勿論ならん。是二人共に信する事は同じけれど、一人は愛あり一人は愛うすし。我等が如來に對するも亦然らん、假令眞實に深く信すとも、深く愛する情なければ衷心より其美を稱する能はず。眞實に如來を愛する時、我全體が自づと如來に同化せらるゝなり。

基督已に曰く「愛なき者は神を知らず、神は愛なればなり」と又保羅は云へり「假令天使の言を語るも、若し愛なくば鳴る鐘や響く鈸の如くなり。山を移す程の信仰ありと雖ども、若し愛なくば數ふるに足らぬものなり。信と愛と望との三の中、最も大なるものは愛なり」と。是れ他山の石なり、以て我が玉をみかくべし。即ち彼等の宗教心すら已に斯の如し、況や大慈愛を以て體と爲る如來に對する佛教の信仰に於てをや。如來は大慈悲の中に衆生を攝めて離さざるなり。故に我等も如來を愛するを以て本とし、厚く信仰すべし。是我が宗祖が彌陀を愛慕されたる告白なり。

(ハ)愛はいかにして發達するや。宗教的の靈き愛を發達させるにも順序あり。又甚麼な風に愛てふものを發するか。人の親子の情に於けるも、胎内より生れ出でし時には左迄に濃やかなる愛情はなけれども、哺育擲養する程に何日と云ことなく可愛さが濃かになるなり。小児の方よりは無論生れて初めは眼も視えず耳も聴きわけなければ母を愛慕する情も未だ出でず。哺乳されて發育するに隨ひ母の顔を見分けるやうに爲れば、母を頼み子を愛するに至る。如來と衆生との間に於けるも亦然り。未だ靈性の眼も見えず耳も聞えずミオヤを慕はしいとも思はざるなり。されど小児が泣く聲に母の乳房が含まれる如く、衆生口に名を稱して念する處に、如來の慈愛の法乳は感受するを得べし。良久しき後には靈性が長養せられて、母子的の愛の如くに、慈悲の親を慕ふ心を發すに至る。朝夕の讃禮や平生の稱名、または知識よりの養ひは皆靈を養ふ資糧たるなり。我等は赤子なり。大なる慈愛の懷に常に抱擁されつゝあるにも拘はらず、未だ母の懐かしい面を見ること能はず。依て「我は唯佛にいつかあふひ草」と常に如來を慕傾して心の妻にかけて忘れざるなり。

「唯いつかあふひ草」の愛慕の情が、自己の中心より出で、如來より靈の増長を欣ぶ原動力なり。如來は眞なり美なり、其最高者に觸れんと欲する我等は、益々高きに擡がれ、彌々美に戀して止まらざるなり。彼異教の書に「汝が心を傾け汝が魂を盡し、又汝が力を盡して汝の主なる神を愛すべし」とは、宗祖が全力を注ぎて如來を愛するに酷似するものならん。

(ニ)甚麼して徳戀しい。宗教心の奥底に輝ける不思議の光は靈なり、其血は愛なり、それが靈の生命なり。それは大なる如來と衆生の靈とに依りて互に血を通はせり。さばあれ、彼は初の程は雲に隠れし月の如くに、中々に其麗はしき容を現はさざるなり。彼に遇ふことは實に容易ならず、逢坂の關は最も難關なり。是の如くして彌戀しさを増す。こゝに於て大師の如くに心を傾けて、寝ても覺ても忘れられずして或物を奏傾して止まざるなり。夫を心なき世間の人はいかに思ふらん。上天に音もなく臭

もなく貌も姿も見えざる者を、甚瘳してかく戀するかと、狂氣の如くに思ふ人もあらん。然れども宗祖より之を見れば却て其反對ならん。世の中に此れほど大なる、是ほど諦かなる者はあらず。加之、世に此れほど靈なる美なるものはあらず。然に何故世の人は之を愛し之に觸れ之を我有にせんとして慕ふ心を發さざる。

彼は實に美なり愛なり。我等が靈性は之を愛慕して益高遠に導かる。彼は最も遠きに在りて而も最も近くして、常に我等を向上せしむ。彼を羨心し愛慕するは奥底の靈性より衝動する力なり。靈性が如來を愛するは同性相吸引する自然の勢力なり。他人より「彼を忘るゝ勿れ」と命せられて初めて動く力に非ず、自分忘れんと欲するも能はざる靈的の衝動なり。夫が如來を羨傾して慕はしき戀しさの禁難き情なり。

(水)母子相憶ひ合ふ。如來と衆生とは元來親子なりしが、一たび親の許を迷ひ出でたる我等は、再び親子の對面に依りて、愛情厚き親の慈悲をうけ、眞の佛子と爲る因縁を、楞嚴經の勢至圓通章を引て述べん。

宗祖の本地と仰ぐ勢至菩薩が楞嚴經の説會に於て、數多の佛弟子及び菩薩衆と共に世尊の命を蒙りて過去に初めて無生忍を得し因縁を告白さる。

「爾時に大勢至法王子が其同倫の五十二の菩薩と共に、即ち座より起ちて世尊の足を頂禮して佛に白して言さく、我昔恒沙劫の事を憶ふに、佛が世に出でまして無量光と名づく、相繼で十二の如來が出現ましく、最後の佛を超日月光と名づけ、彼佛我に念佛三昧の法を教へ玉ひき。其法とは譬へば爰に二人の者ありて、一人は専ら常に憶念して忘れず、一人は専ら忘れて毫も憶はざるなり。是の二人が、若しは逢はず、若しは見、若しは見ずとあり。若し二人が相憶ひ合ひて兩方共に憶念が深ければ、生より生に至り、形と影との相乖異せざる如くに相似たり。實に如來は衆生を憶念すること慈母の一子を憶ふよりも甚だし。然るに母がいかにかに子を憶ふとも子の方より逃避すれば云何とも致し方なし。若し子の方より母が子を憶ふ如くに、母と子とが相憶ひ合ふて、縱令多生を歴ても相違はず。衆生が佛を憶念して忘れざれば、現前にも當來

にも必定して佛を見ん。されば佛を去ること遠からず。餘の方便を假らずとも自から心開きて佛を見るべし。恰も香に染まる身は香氣あるが如し。此を香光莊嚴と名づく。頌に曰く「我本因地に念佛心を以て無生忍に入る今此界に於て念佛の人を攝して淨土に歸る」。

是を宗祖の本地たる勢至菩薩に例せば、親思ひの子が親の念ひに育まれ靈に生れ更りて無生の悟りを得給へり。親を離れて子の成長すべき理なければ靈が動き初むれば親を愛する心を止めんとして止むべからざるに至るべし。

(へ)異性の愛に例す。甲)道詠は肉を以て靈に況す、(乙)感情發達の順序。苟初の色のゆかりの戀にだに、遇ふには身をば惜みやはする。

(甲)道詠は肉を以て靈に況す。人間には肉の性と靈の性とありて、肉の感情に於て異性に對する愛は最も覆しき生命を有せり。世には戀愛の爲に身をも命をも惜まぬものあり。又失戀の結果自殺さへする者あり。古往今來戀愛の爲め懷殺せられ、癡愛の爲め悶死せし魂魄宙に迷ふもの幾干ぞや。又胸を焼き思を焦し、内に燃ゆる情の火より戀の詩と表はれ歌となり、随分百人一首等を見ても戀の歌は少なからず。苟初の色にだに慥迄に身命を惜まざるに於けるを夫に比ぶれば、靈性が永恒の生命を共にする大愛の權化たる如來に對して、神の靈味に觸れ、無上の靈界の美人に接せんと、戀慕の念を生じ、一心に如來を見んと欲する戀慕の情の深き、身命をも惜まざるに至るは敢て怪しむに足らず。是を愛佛的戀慕と云ふ。肉の性が自己の情に適ひたる異性を最も深く愛する時は戀の爲に命さへ賤して我物にせんとす。

況や絶對無上の靈界の美人なる如來に、満天滿地の愛を注ぎて戀せんと思ふ時は、靈性ある我等何ぞ愛慕の念を發さざる。彌々靈界の美人を見ん爲には益々戀愛の情が昂まり、遂には如來の靈に接觸して、それを我有に爲さんとす。然れども、そは容易の事に非ず、爰に戀が叶はぬことなれば、寧ろ死するに如じと思はるゝ迄に到らざるべからず。

(乙)感情發達の順序 肉體に於ける子供の時には、世に母親ほど慕はしき者はなし。小兒は全精神を母に一任して依頼を懐けり。宗教心も亦然り。初心には小兒の母に於ける如く如來に依頼し、生死の苦海に沈みて永劫浮ぶ潮のなき我等を救ひ玉ふは如來の外に在まじ。此小兒の如き靈性を養育して、成長なきしめ玉ふは、大ミオヤのみなり。故に子が母を愛慕する如くすべし。然るに子女も成長するに隨ひて、成年期に近づき、母の許を離れて獨立せんと爲すに至れば、漸く異性を要求する自然の性情を有せり。宗教に於ける感情もそれに例する如き心を發す。如來は常に苦海より救済を仰ぐのみに非ずして、自己の靈的感情的の奥底まで満足を得玉ふなり。宗教心が向上して如來の絶對的に圓滿なる靈格なることを信するに至つては、夫に對して欽慕の情を生ずるなり。又如來は衆生の感情的の最高最美の極みにまで誘導せんと欲して、美と愛との最上の相好を現す。是れ如來が衆生の心靈を開きて、眞善美の極に到らしむる目的なり。感情を最上の美と愛とに爲さん爲なり。感情最美なるものは、如來を愛する心なり。如來を深く愛して、その大愛の中に、己が全體を没入して、如來の愛と自己の感情とを融合す。是れぞ如來無縁の慈悲として、我等を攝取同化し玉ふ佛の力なり。我々の宗教心が成年期に至れば、愛慕の念を發して如來と同棲せんとして止まざるべし。是れ宗祖が荷初の色に況して、靈の愛の深きを詠み給ひし所以なり。

(ト)愛の三階 人の精神生活に三階ありとは前に演べたり。愛の感情にも亦三階に分けることを得。初めに天性より發る愛は肉體本位の我れなるが故に、愛する物も隨て卑し。唯肉體に満足を得る物を愛す。即ち我妻我子、また肉の生活を資くる金錢財産等を無上のものとして愛す。就中、最も中心と爲るものは異性に對する愛なり。

次に理性我になれば高等なる理性より出づる愛なり。そは天性より發るものよりは廣くして、人類其他の生物に對して迄も愛する仁慈とも爲り、又は君を愛し國を愛し、乃至廣く一切の人類を慈しむ愛ともなる。是等の美しき愛情は、世に所謂忠と云ひ孝と云はれ、自己の本心の愛より出づる眞の忠孝なり。愛國家が國の爲には肉の幸福を

犠牲にし、又人類を愛する衷心より、自己を忘れて盡瘁する仁人あり。これらは理性より出づる感情なり。又孔子が「賢を賢として色に易へよ」とは、世には愛する好色の爲に、己がすべてを獻げて熱注するあり、若し賢人を愛すること好色の如くせば自分も賢人に愛化して賢人と爲ることを得るは、是れ孔子が自己の衷心を告白せしと同じく、又哲學者等が眞理の知識を愛するには寢食を忘れて研究に腐心するを以て或る學者は「哲學とは知識を愛する學なり」と云へり。總て人は自己の衷心より物を愛するには、生命をも獻ぐるを辭せず、否、愛を人の生命として活きるなり。之れ等は對象に高低あるのみ。

次に靈性より發する愛は最高等なる理想なり。宇宙最上の美と愛とを有する如來を愛す。如來は宇宙全體の至純至精至微至妙なるものなり。この如來に接觸するものは其靈性を開發せし人にして始めて接觸することを得。自己の情に契ふ肉體の異性に、愛を獻ぐることを悦ぶ如く、靈性は靈的異性とも云べき神即ち如來を愛す。是れ宗教的眞の愛なり。

(チ)愛の目的 愛てふ不思議な感情は、元來云何なる意義より生物に賦與せられしや。大親の聖意なれば衆生の少知を以て測ること能はず。若し試に云はゞ、愛の目的は生命を保護する天使なり」と。されば愛は生命なり。天性的に人が己れの身を愛し又生命を愛す。若し生命を愛する心無からんには、彼は自殺するならん。人は思想卑ければ卑き或物を愛する爲に活きて、異性を愛する性情が賦與せられたるは、其種族の生命を保存する爲なり。若し異性を愛する愛なかりせば子孫絶ゆ。肉の愛はすべて肉の生命保存より出づ。理性の愛は範圍極めて廣し。或は國家を愛し民族を愛し人類を愛す。若し理性の愛なかりせば國家の生命民族の生命亡ぶべし。又賢人哲人等が知識を愛する性情なかりせば、高尚なる學術眞理の教は世に起らざるべし。宗教家は神即ち如來の眞理を我生命として愛し、眞理の光明の宣傳に命を獻げ、而して我と人と共に宇宙の大愛に繋りて生命を共にすべし。靈性の人は大靈の命を我として永遠の生

命を愛し、此が爲に或場合には肉の生命を犠牲にすることを辭せず。

五六

靈性の愛は如來を我とする愛なれば一切の衆生を矢張り自分と同じ様に愛す。此愛無ければ、衆生の麗はしき生命を失ふ。故に菩薩は自ら誓つて衆生を度す爲に愛情を捨てずと云ひ、此愛を進めたる終局は佛の無縁の慈悲と爲る。また我らが佛に成るも佛を愛する性情を有するによる。若し佛を愛する心なかりせば、我らの愛は永久に亡びしならん。是れ愛の目的の極めて廣き所以なり。

(リ) 如來の慕はしさに我曹は如來を離れては靈の生命なし。恰も太陽を離れし地球の如し。我らの心靈の金剛石に輝く光は佛日の反映なり。我らはすべてに超て如來を愛す、如來は又我を愛し玉ふ。

さて全體極樂を欣ぶ動機は那邊にありや。極樂の快樂無窮を聞いて、其樂を獲んが爲に極樂を樂ふや。將た彌陀の靈格を愛して其の慕はしさに如來と共に在らんことを希ふや。卑近な例を以て云はば、某の女が某の家に嫁するに、其女が夫の人格を愛してそれに嫁せんとするか、又夫の人格に拘はらず家の財産とか家柄とかに望みを以て嫁せんとするか。前のは夫の人格を本位とし、後のは家財産を目的としたり。願生の動機に於ても、唯彌陀の人格を本位として生命を彌陀に投じ、彌陀と共に假令地獄の火坑をも悦んで入ると云如きは、彌陀の人格を本位としての願生なれども、唯極樂の快樂を貪ぼりて欣ぶと云ふのは、愛樂目的の信仰なり。世間の相愛し合ふ兩名の間に、假令火の中水の中も、彼と共にすれば厭はずと云如く、愛する彌陀と共にならば、地獄の火の中に入り或は氷に閉ぢられても厭はざる決心を要す、そこで無限の快樂を感ず。愛は生命なり。本心に彌陀を愛する中に於て最大の幸福と最上の満足とは感ぜらるゝなり。宗祖に對しても然り、宗祖は人中の彌陀なり。宗祖の人格を愛する處より宗旨をも愛するに至る。宗祖の人格を通じて彌陀の靈格に觸れ、彌陀の光明に依て自らの人格を形成するなり。自己が彌陀の靈格に同化する時は、十方界至る處として淨土ならざるはなし。故に彌陀の人格を愛慕し、如來と共に常にあることを

五九

欣ぶなり。

六〇

(又) 彌陀を愛するは道徳の源。道徳は經書の研究及修身學の講義にて、暖なる道心は決して發らざるべし。我とまた有ゆる人との間に温熱ある慈愛の通ふ處よりして、眞實に人を愛すること我身と同じ様に感せしむる、是れ慈悲喜捨と云佛子の心なり。我らが心の根底に横はる如來の大慈悲を我心とし、平等の愛に同化せられて次第に佛子の心を發達す。唯自分のみを愛する人は他を忘れ他を排し、知らず不道徳となるなり。故に眞に如來を愛して如來の心を我心と爲る時に、眞の道徳の心情は起るなり。如來は無條件の慈愛を以て凡てを攝め、温かなる懷ろの中に容れて、煩惱の心をも美化して安和を與へ玉ふ。如來は太陽の無爲に照して地上の生物を愛育する如くに、永恒に大慈の光を以て衆生の心を徳化するなり。故に如來を愛して之に同化したる人の愛は、世の爲人の爲に最美の努力を爲して、他人が毀らうが譽ようがかゝる事には關せず、唯すべてを愛するより自己の職として竭すものなり。

(ル) 彌陀を愛するは美の極み。有ゆる世界の塵を捨て妙を撰び、衆生の惡を排して善を取り、純粹の善、至純の美を以て莊嚴するは彌陀の靈國なり。靈國とは清き聖意の現はれなり。彌陀の聖意を離れて淨土はなし、其聖意とは大慈愛なり。愛てふ美の極が、感覺的に現はれて光赫焜耀としては微妙奇麗なる淨界と爲り、之を感情に享くれば熙怡快樂極りなき樂園と爲り、其大慈悲の中に溶入する時は、此處に在り乍ら實に清淨の靈感極みなく、歡喜と妙樂は油然として湧き出づるなり。彼の淨土は此大慈愛の全體の現はれにして、此處には如來を愛する理想のみに現はるゝなり。如來に融合する時は、神は淨土に栖遊び、八功德池に心をすませば、調和冷煖にして自然に意に隨ひ、神を開き體を悅しめ心垢を蕩除す。清明激濁にして淨きこと形なきが如し。寶沙映徹して深しと雖も照さずと云こと無し。微濁は廻流し、安詳として徐に逝て、波は無常の妙聲を揚ぐ。其所應に隨て聞かざる者なし。乃至如來の愛に容れたる心には三塗苦難の憂なく、但自然快樂の音のみあり。彼の淨土は死後とのみ思ふ勿れ、如

六一

來の中に念を融け入れれば、經説は我心の實感とはなりぬべし。我として愛すれば斯く總ての階級に通じて、愛は生命にて、生命は愛にありと云ふべし。

(ヲ)同様の要求に總ての階級に亘りて相愛する異性を得れば、其愛する者を我物として夫婦同棲し、夫と生命を共に爲んことを望む性情あり。肉體にては自己の情に適する者を愛して、夫を我有として同様せんことを望む。理性には賢人を慕ふて止まず。

靈性が靈界の神格を愛して我有とし、我生命をも獻げて一體不可離の關係を得ざれば止まざる情を發す。此れ靈の戀なり。肉の愛は生理に規定せられて、畢竟種族保存の自然より衝動す。靈性が神即ち如來を憧憬するも、靈の衝動より發する高等なる感情なり。

肉體が兩方の愛を合體して新らしき生命を生む。子を産む如くに靈性が如來を愛慕し、靈應に感觸し、神秘冥合の妙用よりして靈き生命を生み、かくして聖子と爲る。此神秘的合一を得んが爲め、準備として發するは靈の戀なり。此靈の戀は最高尙にして、深遠に微妙不可思議なる感情にて、宗教的天才の胸中に熱烈に活動する力なり。

彼は己が靈き生命の緒を神の愛に縛りて、幾重にも縛りつけ、いかなる事情の下にも永遠に繋ぎつけて斷絶することなきを樂ふ情なり。我は無上の最高者と結びて、永遠に割なき仲と爲ることを、又なき幸福として自ら悦ぶに至る。如來は智慧と仁慈と及び萬徳、圓かに備はりて微塵許りも缺點なし。斯る靈格が無上の愛を以て我を愛し玉ふと思へば、我らは全生命を獻て彼に容れんことを欣ぶ。我はあなたの物なれば亦如來は我物なり。此靈的結婚は永遠に離れの患なき約束なり。かくて寢醒離ることなし。而して彼は何時も我爲に有ゆる娛樂を與ふ。彼は無盡の持參金を以て我に來れり。我の無限なる心靈上の幸福は悉く彼の齎らし來る寶なり。我の忍ると

き彼は無量の慈を以て我を宥め玉ひ、我愛ひに沈む折は彼は無限の福音を以て我を慰め玉ふ。我が日々の作業に非常なる力を與へ、最も弱き我に最も強き力を加へ、我は現在を通じて永遠に最高者と同棲することを得るは無上の幸福なり。彼の偉大士が、

夜なく佛を抱いて眠り、朝なくは遠た共に起き、語黙居止を同ふし、座起鎮へ

に相從ふ、纖毫も相離れず、形と影との如く相似たり、佛の去處を知らんと欲せば唯這語聲此なり」

孔子が「賢を好むこと、色に身へよ」と。靈性に於ても、靈性の發達せる仲間の愛情は古今同様なり。

(ワ)佛を慕ふ古今の偉人宗教の中心眞體は感情なり。眞體に靈の生活を求むる人は靈的人格の如來を慕ふて止まざるべし。されば教祖世尊入滅の後已に前師に後れ、未だ當來の彌勒世に出でず、此中間に在りて人あるひは石窟に入て慈尊の出世を待ち、

亦是龍神の身と爲て龍華の曉を期す。然るに大乘の門開くに曼んで正に眞實の義を彰す。縱令娑婆出世の佛陀を待たずとも西方の淨土に往かば彌陀現在して説法すと。何ぞ徒らに無數の時間を失はん。此法門開くるや大早に雲霓を望むが如く、文殊普賢を

首とし、龍樹天親等の諸大士、及び諸の賢聖衆より、乃至一切の階級に亘りて現在説法の佛を慕ひ、淨土に望を期する者甚だ多し。又一方には法華眞實の道に入れば、必ずしも死後の西方に往かすとも、常寂光の淨土には常在説法し玉へり。淨土遠からず一心に佛を見んと觀じて、身命を惜まざれば此に現じて即ち説法すと。彌進んで彌々不思議なり。現身のまゝ見佛を得る所以は、實には佛と衆生と本來眞實の父子なれども、未だ吾等赤子にして親を知ることを能はず、常に佛と共に在り乍ら見えず、

若し親の慈愛に育まれて靈性さへ開くれば、懐かしき御面を瞻むこと疑ひなしと。法華經に説く處の本佛と云は、即ち彌陀無量壽尊の事なり。故に彼の西方の淨土の如來と、吾らが此處に在て瞻むことを願ふ如來とは本來一體なり。

古今を問はず自分の願はしき宗教心が發達すれば靈的人格の如來を欣慕して忘るゝこと能はざるに至る。實に如來の御圖らひは不可思議なり。縱令命を捨つるも、現世に於て佛を瞻んことを戀慕ふものには、此處に現れて説法し、また此世にては迎も及ばずとて、彼處に到りて現在説法の會に列らんと望む者の爲には、彼處に於て瞻上ることを得。實に如來の在まざる處なきが故に、父子相見の機縁熟したる處に於て面

見することを得べし。

六六

(カ)如來の麗はしき相好は愛の現はれ人間同志にても、自分が愛する人に向ふ時は麗はしき顔を以て表情す。如來が衆生を深く愛し玉ふことは、最も微妙に最も美麗に表現し玉へる相好を観るも察し奉ることを得べし。其所以は、如來は本法身智慧の身に、相や形を超絶したる靈體なれども、深く衆生を愛する愛の表現より、無比の靈妙なる色身、美麗なる尊嚴なる相好と現はれ、衆生の心を排發して愛慕の心を生ぜしむ。

經に「如來は八萬の相好より無量の光明を放ちて普く十方を照し、念佛の衆生を攝取して捨玉はず」と。如來は滿天滿地の愛を以て衆生を抱いて離さず斯る宇宙に上なき如來が、恚までに我を愛念し玉ふに、我ら争か愛慕せざらんや。如來の妙色相好の麗はしきは、衆生を愛し玉ふ心の現はれとは何を以て知るとならば、經に「佛身を見る者は佛心を見る。佛心とは大慈悲是なり」と。斯く我らを愛し玉ふ内心の麗はしきが、恚く美しき相好と現はれて、我らを誘引し玉ふと想へば、いよく麗はしきなり。

之に依て如來の靈體に接せんと心の發動す。彼のプラトーンが理想の愛をのべて「美は天上の容姿に伴ひて輝きつゝある者、彼若し地上の現前に現はれ來ると雖も、是の最も純潔なる感覺の際より其清き光を發する者、若し人世に生れて素様に於て、且つ前世に於て常に光榮を觀得たりし人は、其神の清貌を見て神聲端單なる相好に驚愕せざるはなし。先づ一瞥の下に悚然として身戰き、亦宿世畏敬の餘情は自から油然として湧き來り、恰も神像に對する如く身を投じて之が犠牲たることを辭せざるべし」とは蓋しプラトーンが理想の愛の消息を洩らせし如くに、宗教的天才の神的戀念は、常に理想の美天國に逍遙し、晃曜赫々たる光明は胸臆に往來し、其麗はしき其覆ばしき何物か之に比類すべきものぞ。吾人は宗教的偉人の胸裡に燃えつゝある靈の戀の熱度の高さと、神的感情の深遠なるとは、世の最高理想の極みなりと思ふ。

敎祖世尊が六根清らかに姿色永へに麗はしく在せしは、靈界に輝ける彌陀を憶念し

六七

つゝある反映にあらずやと信す。感情的愛の信仰は、靈界なる人格的の如來を求めて止まず、而して靈界に輝ける人格的の愛の現はれなる、相好の美しき如來の愛の中に融け入るほど微妙なる靈感はなからん。

六八

(ヨ)如來を慕ふ賢聖に宗教的美の感情、また靈的理想の缺けたる人には、偉大なる宗教家の理想は神に懐かれ微妙なる靈感の如きは想像にも及ばざるならん。聖龍樹尊者は、自己の理想に懐かれし如來を讚め稱へて、「面善圓淨にして滿月の如く、兩眼は清きこと青蓮華の若し、聲は天鼓俱翅羅の如し、故に我れ彌陀尊を頂禮す」と、乃至數々の頌を以て如來を讚美したるは、靈界の美愛を慕ふ處の餘滴ならずや。

聖觀音の頭に彌陀を戴けるは、常に如來を憶念して離れざる愛慕の表示と信す。聖善導は「彌陀の眞金色にて圓光徹照し、端正無比なる相好を永しへに憶念し玉ひし」と。また「衆生佛を憶念すれば佛も衆生を憶念す」と。また「彌陀の應身籠々として常に目前に在り」と。亦聖源信は、「ぬれば夢さむればうつつ束の間も、忘れ難きは彌陀の面影」と。斯の偉人等が靈的憧憬の水満てる處に、愛の權化の如來の月影は永しへに宿りしにあらずや。如來の大なる愛より湧出でて吾胸裡に滿てる愛の戀の水には麗はしき日の如くに輝ける相好が映現す。宗祖の「我は唯寢てもさめても靈界の美人彌陀の麗はしき慈愛の顔を見まほしく、其戀しさはいつとて心の妻に懸らぬ際もあらぬ」とは、いかに愛慕の念の深きことよ。尙進んで「荷初の色事にさへ身をも命をも忘るゝに、況して永恒にまで添うて幸福を共に爲る彌陀を慕ふに、假の身や命など何を惜しことあらん」と。是れぞ法華經の「一心に佛を見んと欲して身命を惜まず戀慕するものは、慈愛の權化なる佛の麗しき相好を以て出で、法を説て聞かすなり。のみならず、還て佛の方よりも衆生を愛念して待ちつ焦れつ、何時かな彼を度せん、何にせば彼は我意に隨ふらんと、忘るる間なく念じ在す」と。憶ひ憶はるゝ兩方の、念ひと念ひと能く合致する處に、永遠に離る能はざる割なき仲を形成するなり。宗祖の斯の如き、彌陀に對する靈的愛慕の結晶が靈的の金剛石と化し、彌陀の光明が其寶石に反

六九

映して「明照」の嘉號とも表はれしなり。

七〇

(4) 念佛三昧

初 三昧入神 (靈の誓)

阿彌陀佛と心は西に空蟬のもぬけ果てたる聲ぞ涼しき

次 三昧正受 (靈の誓)

阿彌陀佛と申す計りを勤めにて淨土の莊嚴見るぞ嬉しき

初 三昧入神 (靈の誓)

宗祖の心靈の精髓より洩し玉へる念佛三昧入神の妙用を此道詠とし、之を規範として三昧を行せば造詣すること深からん。

(イ)三昧の意義……(ロ)三昧入神……(ハ)思惟と正受……(ニ)入神の七覺支

り、念佛三昧の起行の用心は爰に在り。三昧とは等持定と云ふ。口に稱名を唱へ、意を專注して彌陀を念じ、漸々に餘の雜念を薄らぐ、念する所の彌陀に神を投じ、彌陀が我れか我れが彌陀かと、離れぬ精神状態に入りて、完き調和の成りし處を即ち三昧と云ふ。三昧を又直調とも譯す。直調とは對象とする彌陀の靈中に直覺的に集注して、完く能く調和し合一したる處なり。思ふに人は意馬心猿の如く、常に騒がしくして暫らくも止まらず。然れども唯一心に口稱三昧に入りて意を用うる時は、自づと直調となるなり。要する處は一心にあり。

(ロ)三昧入神 三昧を行すには第一に入神を大切にすべし。入神とは自己の識神を彌陀の靈中に投ずるなり。真に自我を如來の靈中に入る時は、餘念全く亡じて恰も蟬の脱殻の如く、而して識神は彌陀の靈中に清き聲を揚ぐるなり。我れ彌陀に入るが故に彌陀我れに在り。月や我れ我れや月やと分かぬまでに、如來に合神するを云ふなり。

七一

七二

世の技術などに於ても全く其妙を得んとせば其業に入神するにあり。王羲之が書中に神を入れ、吳道子が畫に魂を投入せし如く、何の道に於ても魂を業中に入れざれば其妙を得ること能はず。吳道玄が馬を畫かんとして一室に閉籠り、冥想に馬を畫けるを門人が隙間より窺ふに、道玄の身は見えずして唯白馬のみ觀えしと。他日又觀音を畫かんとして冥想に入り、觀音を意に畫けば、門人窺ふに人を見ずして唯觀音の影のみを見ると。これ所謂入神の状態なり。卑近な例なれ共、好角家が相撲を見る時矢張り自己の力を其中に投入して見るが如し。宗祖が一夜佛間に在りて口稱三昧を行じ給へるに、弟子等が其音聲を聞いて、あまり朋らかに澄みて、いみじく尊とく感じて其際より窺ふに、御身の邊り夕陽の如くに輝き居たりと。又或時は大身の如來現前せしことを門人らが拜み奉りけるとや。其時には三昧の識神が佛と爲りしや、佛が其人の心となりしや、この一體不二が即ち三昧なり。これを入神の境と云ふ。

(ハ)三昧の思惟と正受 此事は觀經の「我に思惟を教へ玉へ我に正受を教へ給へ」と章提香が世尊に請ひし語なり。此は淨土の莊嚴を觀るに就ての方法なり。導師は此を釋して、思惟とは彌陀の佛身淨土の莊嚴を觀する順序として、初めには法眼未だ開けざれば、先づ教を受けて其佛の相好等を想像に浮べる邊を云ひ、正受とは自己の靈性が發達し三昧も成熟せし故、法眼が開けて直覺的に靈像が顯現する了々たる邊を云ふものにして、これ凡夫の想像の及ばざる處なり。喩へば初には障子を隔て、皎月の有る方を想見するが思惟にて、彌陀障子を開きて正しく月を眺むるのが正受なり。正受と云ふは正しく彌陀の相好淨土の莊嚴を觀見し、法眼の開けたる處なり。法眼を開かん爲には識神が彌陀の靈中に投入せざるべからず。茲を導師は「此三昧を得んと欲せば雙盲瘡啞癡人の如くに成て、彌陀の靈中に識神を投せよ。然らざれば心識騒がしくして定意散亂し、容易に法眼開くこと能はず。法眼開けざれば淨土を見ること能はずと。

(ニ)三昧入神の七覺支 念佛三昧の思惟を階級として正受に入る。其心行の順序を説

三七

明するものは七覺子なり。七覺子とは、一擇法覺子、二精進、三喜、四輕安、五定、六捨、七念是なり。是の七覺子は植物が成長して枝葉繁り遂に花が開くに例へん。之れ念佛三昧の心靈の開く状態なり。

初に擇法覺子とは彌陀に入神の着眼點なり。正に正鶴を認定する。擇は簡擇とて已に前方便の素養あるを云ふ。喩へば太陽と云へば太陽が心に浮ぶ如くに彌陀佛と言へば彌陀が思想に現はるゝ如し。然る時は夫が正鶴を擇びて心々連續して神を其中に入らるゝなり。動すれば雜想妄念群り出で、正境を亂さんとす。意思を凝して正鶴に向はしむ。擇法は是れ神を統一するの法にして、或は佛の白毫に意を注ぎ、或は總相を想ふもよし、また専ら名號に專注し、口稱を以て心を統一するもよし、要は一心統一して、彌陀の靈中に神を入るゝにあり。

二に精進覺子とは、正鶴に向て心々相續するに勇猛精進に身を責め己を推きて靈性を發揮す。縱令彌陀の日光は照せども、金剛石も未だ研がざれば日光を反映するの性徳顯はれざる如し。肉性を責め理性を碎きて靈性を發揮すべし。導師は一切の毛孔より汗を流し、眼より血を出し玉ひと。宗祖は極寒にも熱汗を流し玉ふと。先聖已に然り、後凡何ぞ倣はざらん。

三に喜覺子とは、一心に念佛する密には彌陀の靈光射し來る。春風徐に吹きて和氣霏々と流る。三昧の兆候靈性に現す、心益々微に入り心氣彌々朗かに、未だ旭日を見るに至らざるも東天已に暈をなす、此の時の歡喜天地に充つ、是れ喜覺子なり。

四に輕安覺子とは、神が確かに如來の靈中に入りて定中の喜を覺ゆるに至れば、已に神が如來に乗り得たるなり。如來に乗りえたる意は無我なり。無我無意識に爲れば心意を煩はす物なし。身心共に輕安を覺えて即ち我が有を感せず。

五に定覺子とは、心が漸々微に入り妙が加はり、彌々心靈の日光が顯はれ來る。金剛石に日光が加はれば、石は日光を我物として光を發射するが如し。月は天に在り乍ら我眼裡に在り、我が眼に在り乍ら月天にあり。如來が我れとなりしや我れが如來と成

りしや。徳本行者が、徳本が佛に成ることは難い、彌陀が徳本となるのは即今南無阿彌陀佛の當念なり。三昧入神の妙味こゝに在り。三昧入神、生佛冥合、この心靈の花開く時、彌陀の靈應正しく我靈性と合體す。春日麗かなるに色美しく香馥ばしき時、雄藥、花粉は雌藥に入る、是が此れ聖胎と爲り、眞の佛子と爲るの妙機なり。

六に捨覺子とは、捨とは任運無作とて念佛三昧の意思の用心が、初めに注意を怠るといつの間にか心が佛と離別すれども、漸々純熟するに隨つて竟には注意を要せずとも自ら三昧を成するなり。例へば射を習ふにも、初めには餘程注意せざれば矢ゴロを失へども、能く稽古を積む時は自からの中するに至る。三昧も熟すれば自然と佛心と相應して離るゝことなし。

七に念覺子とは、念とは一人一日の中に八億の念あり。已に佛子の核となりし上よりは、寤寐に念々に其核が中心と爲りて、恰も果實が漸々に長養するが如し。是れ即ち各自の人格を形成する元素なり。若し惡人にして地獄の性格と爲る者の核は、枳の如き果を成熟する爲に、日々惡業増上の働を積んで地獄の種子を造り、夫が熟すれば身は人間に在り乍ら已に地獄の業識が熟するなり。若し念佛三昧を以て業事成辨する時は、身は此土に在り乍ら既に彌陀の種子を其人の心靈に成熟するを以ての故に菩薩聖衆と云はれ、其中心より起る三業の所作は悉く佛子佛心佛行となるなり。

次に三昧證入

阿彌陀佛と申ばかりを勤めて、淨土の莊嚴見るぞうれしき
 (イ)宗祖の發得……(ロ)三昧發得の證明……(ハ)靈驗の種々なる方面
 (イ)宗祖三昧發得 宗祖三昧發得の事は、御傳及び三昧發得記等に録されしことなれば就て披見し玉へ。今暫らく三昧發得記を抄せば
 建久九年正月朔日趣山桃法橋敷慶之請歸庵之後未刻正月一七箇日恒例別時念佛初之初日光明少現第二日水想觀自然成就又瑠璃地相少現至第六日後夜瑠璃地及宮殿相現二月四日早晨復瑠璃地現其相分明同月七日復瑠璃地現凡上來種種相自正月一日

至二月七日、卅七日之間、願我平生課念佛六萬遍、不退勤修由之、今此等相現歟、二月廿五日日出、如赤囊、物又出、如琉璃壺、物前則閉、目見之開、目即失、今即閉、俱見、同月二十八日、少有病惱、由暫減念佛、或一萬遍、或二萬遍、隨意勤修、其後右眼有白光、現光端青色、又出、如琉璃光、其貌如壺、內有紅花、狀如寶瓶、又日沒後、出望四方、各方有赤青色寶樹、高下無準、或四五丈、或二三十丈、其相宛如經中所說、九月二十二日、早晨又瑠璃地現、周圍可七八步、朗然映徹、乃至建仁元年二月八日之後、夜聞極樂衆鳥并管笛等音、其後日間、種種音聲、同二年正月五日、佛殿勢至菩薩像後、即彼菩薩丈六許、頭面三度現、又彼菩薩丈六許、真身現、同十二月二十八日、午時、高島少將乘訪謁於佛殿、法話、問念佛如常阿彌陀佛、形像之後、即彼佛、丈六許、頭面透徹障、而現少時、而沒、元久三年正月朔日、勤修恒例、七日念佛、至第四日、念佛之間、阿彌陀佛觀音勢至三尊、共現、大身、五、亦現

上人常ノ居所ヲアカラサマニ立出テ歸リ玉ヒケレバ阿彌陀ノ三尊繪像ニモ木像ニモ非ズシテ垣ヲ離レテ板ツキニモツカズ天井ニモツカズ現シ給フ無量壽佛化身無數與觀世音大勢至常來至此行之人所ノ文
此外御傳等に就て。

(ロ) 三昧發得の證明 三昧發得は冷暖自知にて自己の實驗なり。然れども如何なる分齊より發得せらるやに就ては又證明を要す。

群疑論に録する所によれば、三昧を得ることは何を以て知ることを得る、頗る聖教有て能く證知することを得るや。釋して曰く、但當さに憶想して心眼をもて見せしむ。此事を見る者は即ち十方一切諸佛を見るを以ての故に念佛三昧と名づく」と此を以て證とすべし。行者平生に種々に修道すと雖も、三昧を得ずんば見佛すべからず。遂に見佛を得れば三昧を成じたるなり。若し三昧を得ざれば見佛すべからず。故に三昧を得する證明は見佛にありと知るべし。喩へば人が目を患へば衆色を見ざるも、大醫師が能く眼を療治するに金律を以てする如しと。

(ハ) 實驗の種々なる方面 三昧發得して見佛するとは、基督教にては聖靈を感ずと云ひ

禪にては見性また大悟と云ひ、密家には悉地を得ると名づく。是等其名は異なれ共、要は宗教意識が全く基督教に所謂復活の状態に入りたる所にて、即ち活信仰と云ふ邊に於て同一なり。喩へば卵子が孵けて卵殻を出て雛子と爲りしが如き心靈の状態を云ふ。吾等衆生は佛性を具すと雖も、孵化せし鶏とならざれば、靈の生命未だ顯動態に復活せざるべし。從來の煩惱我が死して靈我が復活することに於て、禪に之を大死一番と名づく。是れ三昧發得の状態なり。名は異にして實同じ。恰も人の心が開黒態より光明態に轉化せし處なり。其方面を異にするは感覺と感情と知力と意思と云ふ如く、三昧を得て佛の相好光明等を知見するは靈の感覺なり。佛の相好及び淨土の莊嚴は觀見せざるも、心が廣き天地に出でたる如き氣持に成りて法悦に滿され、感謝の情禁じ難き底に感じたるは、感情の方面に復活を感じたるものなり。また禪の見性の如く、獨朗天真が顯はれ、本地の風光新天地に逍遙するもあり。佛知見を開示して佛の正道に悟入すると云ふ如きものもあり。超然たる大家に於ても、澄々たる秋天に皎月さやかに照して一點の雲なき状態に入り、實に涼やかなる澄心湛ゆれども、而も識神の愛に感ずるものあり。又暖かなる如來の慈悲に抱れ乍ら其感なきものあり。或は温かなる春日和氣の中に無上の慈愛を感じ乍ら、自性天真の空を知見すること能はざるものもあり。大靈界の至眞と至善と至美との新天地に出でて、相好光明の佛及衆寶莊嚴の淨土を見ながら、而も自性清淨の天は永しへに朗かなりと感ずるものあり。温かなる慈愛の中に法悦の妙味を味ひながら、而も無生の法忍を悟るあり。自性は十方世界を包めども中心に儼臨し玉ふ靈的人格の威神と慈愛とを仰ぐもあり。眞空に偏じず妙有に執せず、中道に在て圓かに照す智慧の光と慈愛の熱とありて、眞善微妙の靈天地に神を栖し遊ばすは、是れ大乘佛陀釋迦の三昧、又我宗祖の入神の處なりとす。冀くば識神を淨域に遊ばしむることを期せよ。

(5) 念佛三昧の實 (功果の内容)

あみだ佛に染る心の色に出でば、秋の梢の類ならまし

(イ)彌陀に靈化したる心相…(ロ)三味の果は人格に結ぶ…(ハ)人格の花と實…(ニ)美化せる感覺…(ホ)歡喜に充たさるゝ感情…(ヘ)智慧光に照

とされし智力…(ト)道徳的に感化せる意思

(イ)彌陀に靈化したる心相…我祖念佛三味に入りて年久し、口に稱ふる處は六字の聖號、意に念する者は彌陀の本願、念々如來の心光を被り、聲を彌陀の慈愛に觸れ、智慧の時雨に逢ふ毎に、眞善微妙の色を添ふ。黄葉益々深ければ美化の紅、彌陀濃かに、彌陀に染まりし功果は、即ち宗祖の靈的人格の核を爲す。おもふに縱令權化の大師と雖も、昔し黒谷の報恩藏に入りて聖教に眼を晒し、鑽究に意を集めし當時の心象は、吾人に云はしむれば、理性の範圍に於て佛敎を究め、華嚴を繙く曉は重々無盡の教義に心を注ぎ、法華を披く日には實相十如の文句に思を潜め、般若を閱する時は一切皆空に意を留め、涅槃を見る夕には、常住佛性の味をなむ。大師の智慧徒らに文字の葛藤に捕はれて、貴重なる精力を徒費する如き愚を倣はざるは勿論なれども、然れども未だ佛敎を研究の材料として、靈性を復活するの資糧とはなし玉はざりしなり。後に初めて反魂の靈藥を發見し、專修一行の念佛に歸し、本より天稟に豊富なる宗教的の資材に、加ふるに起行の激烈なる、寒夜に汗を流す功を積み給へり。然るに三味の彌陀我に有り、我れ彌陀に在りて、いつしか靈化せし功果は圓滿なる人格の靈核となり、八面玲瓏として恰も教祖釋尊の「諸根悅豫し姿色清淨にして光顏巍巍たり、明淨なる鏡の影が表裏に暢るが如し」とは、彌陀の靈光に淨化せし教祖釋尊を讚美したる阿難の語なれども、教祖を範として、彌陀に美化したる我宗祖に適用して妨げなからんと思ふ。教祖と云ひ宗祖と云ひ、自から彌陀に靈化したる人格を以て範を後昆に垂れ、一切をして彌陀の大慈悲の下に攝化を被らしむる聖意なればなり。

(ロ)三味の果は人格に結ぶ…宗敎心、否念佛三味の麗はしき花と靈き果とは人格の聖き枝に咲き、心靈に結び、口稱の功果は自己の人格に具はる。謂ゆる究竟如虛空廣大

無邊際の淨土の莊嚴、七寶の宮殿七重寶樹の花も有ゆる淨土の莊嚴は、彌陀の大人格の心靈に開きたる花と云ことを得。六十萬億の金色身、八萬四千の相好も無量功徳の大人格に結びたる果に外ならず。彌陀の大靈格を離れて依正二報の莊嚴有るべからず。宇宙の大なる靈格に結びたる念佛三味の種子は、釋尊の人格に正覺の花と開き涅槃の果を結びぬ。三世諸佛の正覺と云も、實に念彌陀三味の心に開きたる花なり。彌陀の大靈格に結びたる果實は、念佛三味の種子として十方世界に播布さる。此佛種子が識神に攪入すれば頓に無量の罪消て、頓て三味の花を開く。三味の花開く時は大なる彌陀の靈に開かれて、廣大無邊際の際實莊嚴の淨土を見ることを得ん。彌陀の心靈に開きし花なれども、我らが心の開く處に顯はれるとは實に不思議と云はざるべからず。茲を導師は「彌陀佛國能所感、西方極樂難思議」と讚じ給ふ。念佛の種子を心靈に受て最も美しき人格の花奇しき果と熟したるは我が宗祖の靈的人格なり。之れ念佛三味より成熟したる結果なることを忘るべからず。我らはこれに倣ひ之に隨ひ、自己の靈的人格を形成すべき天分を負ふものなることを自覺すべし。

(ハ)人格の花と實…植物生活に於ても、若しは草にまれ小樹にまれ、成長期に達すれば花が咲き實を結ぶ。靈的人格に於ても之に比例すべき性を有するなり。道詠のうち初の選擇名號は聖の種子にて、愛樂の道詠は花が咲かんとする準備にて、念佛三味の二首は正しく花が麗はしく開きたる姿にて、今は正しく三味の實を結びたる姿なり。然るに生物進化の説にも適者生存と云ふ語あり。植物の種類は澤山有れ共、其土地に能く適當せる物は益々繁殖して成長し易く、其反對に不適當なるものは動もすれば其種族迄も失ふことあり。春の氣候を待て適地に種子を播下して、大に其植物が繁殖する如くに、我祖は時機を得て最も適當せる念佛の法種を播す、其流行の盛なる未曾有なりと云ふべし。就中、御自身の人格に咲ける靈花の美麗なる爛漫たる容色、靨郁たる香氣其光景は、あみだ佛と心を西にうつせみの神識が、大靈の粹なる彌陀に投合し、形骸は此處にあれ共心は咲匂ふ淨き御國の園に逍遙し、念佛三味の花開く處に

浄土の莊嚴は宛然として現前す。是れ大師の人格の花と云ふべし。次に彌陀に染化したる麗しい果皮の色、最も美なる果味となり之を喰ふ時は陶然として快樂極りなきを覺えん。加之、永恒不死の生命となるべき靈格の核を成熟す。是が我祖の人格に結びたる果實なり。斯の如く皮肉骨髓共に完全なる靈的人格を形成する處の各部分を分類して各方面より説明を試みん。

(二)美化せる感覺—身體を組織せる皮肉骨髓精神の感覺と、感情と智力と意思とに比例して、彌陀に淨化したる靈的人格の内容實質を分解して見れば、感覺は皮膚に比例す。人の感覺を美化する如來の方は即ち清淨光なり。全體我等衆生は自性に清淨心は有すれども、前生よりの染汚とか、又遺傳とかの汚れを有し、又後天的にも眼耳鼻舌身が外の色聲香味觸法の色を視聲を聞き香を嗅ぎ舌に味ひ身に觸るゝなどより自然と我心を染汚せり。美色美味等の慾の爲には、衛生及道德上の害に爲ることをも顧みずして敢爲し、色に荒み酒に耽り美味を嗜み飲食度なく、或は華美なる衣服其他化粧等の爲に心を汚し、または其の奴隸と成り、或は肉慾の爲に墮落の淵に沈む族も少なからず。感覺慾と云ものは唯一時の心を汚すのみならず、段々昂進する結果は、病的に陥ることあり。例へば喫煙や飲酒の如く、すべて感覺の刺激に馴れるに隨つて、度を増さざれば感せず、漸々に進んで竟には習慣が病的と爲るなり。古來豪傑と云はるゝ人も、蛾眉粉黛の色麗に捉はれ、酒煙の奴隸に陥れる輩の多くあるを耳にす。色と聲と香と味と觸との五欲は、人の心を染汚するもの故に五塵と云ふ。又人の徳義心や衛生思想などを賊なふ過失あるより五賊とも云ふなり。

之を自覺させ而して五官の感覺を清淨美化する如來の力を、清淨光と名づく。外より習慣的に汚染せしのみならず、本來の凡夫の感覺は汚れたるものなり。之を清めて美しくするのが如來の清淨光なり。

果物を以て云はゞ、能く成熟すれば、外皮の赤とか黄とか麗はしくなる如く宗祖の人格の高潔なる、闇夜に光を放ちて書を読み、また頭光を放ちて月輪殿を感せしめし

如く、清淨光が念佛者の六根に映現しては六根清淨となる。また大悟徹底せし心靈上に、八面玲瓏として身心皎潔なる無我を感じ、又美化したる心の靈感は、天地新らしく靈口麗しきを覺ゆ、彌陀の清淨光に感せし心は、恰も日光が寶石に映せるが如く、また心の花開きて快美に妙香馥郁として靈感極りなきを感じ、心耳には天樂和雅の妙音に爽快極なきを覺え、心には八功甘露の水に津々たる滋味を受くるなり。一度清淨光の中に融合せよ、實に八功德池に浴するが如く、調和冷煖にして自然に意に隨ひ、神を開き體を悦ばしめ心垢を蕩除し、清明微潔にして淨きこと形も無きが如し。こは之れ靈界に逍遙する心の状態なり。淨化したる感覺は、身は娑婆に在り乍ら神は清き園に栖み遊ぶ。唯識には一水四見の喩あり、同じ水なれども、人には水と見え魚類は空氣と感じ、餓鬼の業識には熱水身を燒くかと感じ、天人の清眼には美しき瑠璃地と見ゆと。實に人間が自分の業識にて天地萬物を人間相應に感覺しつゝあり。若し佛眼を以て見れば此處も清淨佛國土にして無比の莊嚴を觀ることを得ん。我等は宗祖の淨化せられたるを模範として一心念佛して、彌陀の光に淨化せられて六根の清淨光中に相應せんことを樂ふべし。

(水)歡喜に充たさるる感情—精神の肉は感情なり。また血を循らして人格の内容を豊富にし麗はしくするものは感情の美なり。全體人間本來の感情は、能く調はすして人格の核も性も、自我即ち自分勝手のものなり。唯己が肉の幸福や、又は我慾にて、名譽なり財産なり權利なりのそののみを渴望して、唯現在のみに汲々とし、自分さへ良ければの主義を取るなり。人生は肉の快樂を享受すべき舞臺と想ひ、唯形の上の幸福のみに焦る。實は還て夫が不満足を感じたる原因となり、私慾の強き爲に名譽や財産を飽くまで貪ぼり、爲に不足と煩悶の種を蒔くなり。元來此世界は、斯る人々の欲望を満足せしむる爲に發生せしに非ず、眞實に人生の幸福を得て満足に生を送らんとせば、自分の淺薄な心を且らく捨て、人類を永遠に救済さるゝ慈悲の福音を聞くべし。世の光なる宗祖の化益に浴せよ。大師の圓滿なる人格は鏡を後世に垂れたり。大師が

「我は是れ十惡の法然房愚痴の源空なり」と一身のすべてを獻げて、大慈の懷に抱擁せられ、攝化せらるゝ外に道なしと、専ら本願の念佛を行じ給ひしは、大悲の懷に攝められたる佛の卵は、頓て解化して、佛の眞面目となりて顯はれたり。

感情の信仰には、如來の恩寵を仰いで微かなりとも光明に接すれば、從來の己が甚だ非屈なることを感ずべし。實は己は恩しらすの罪人、無慚愧の動物なりと罪惡觀を昂むるに随つて、如來を頼む心も彌々強くなるべし。大光明を得ざれば解脫し難しと思ふ時は、益煩悶の度を進めん。彌陀を欣慕するの情を深く起し「我は唯佛にいつかあふひ草」と、其至誠熱烈なる信念を即ち煥位とす。此暖みが心靈の解化を被むる内因にして、恩寵と仰ぐ處に大なる慈悲の溫熱に抱擁せらるべし。いよく、あみだ佛と神心を彌陀の靈中に投映して、其極に達せし時に、神秘融合不可思議を感じて靈の蕾は綻び、爛漫と麗しく覆郁と芳ばしく、啐啄同時に皮殼我の中より墜き我が難の如くに、啾唳たる稱名の聲と共に生るゝなり。而してそれが大悲の懷の裡にして、いつも歡喜の日光は麗らかに照り亘り、歌ふ鳥の音、笑める花の色、何かは歡こびの種ならざる。歡喜の光に融合すれば神は常樂の園に安住する想ひ、如來の信受法樂をば、むかしは遠き入日のそなたに望みしも、今は曉の寢ざめの床にも感せらる。一度び開きて永しへに咲匂ふ心の花をば、いつも如來と共に眺めつゝあるなり。未だ靈の花は散らざれども、人格に結びたる靈の果は、はや熟しぬ。日々に味ふ處の甘美はこれぞ法悦とや名づけん。甘くも酸くも種々なる無限の妙味は、意のまに味はる。悠く美味に熟せし上は、必らず髓とも云ふべき核も成就せること疑ひなし。悠る美味を此世乍ら味ひつゝ生活せらるゝは、是全く宗祖の人格に結びたる種子の賜ものと想へば大師の恩を感ぜざるを得ざるべし。

(へ)智慧光に照されし知力、生理學上より云ふ腦髓神經の働きは精神系統なり。故に髓は知力と知るべし。是は如來の智慧光に依つて知見を興へらるゝ部分なれば、いかに皮膚も美しく肉も豊富に、筋肉も健全なればとて、腦髓神經の部分に不完全なれば

ゼロと云べし。人は天性の腦及び神經の發達、また理性としては世に賢明なる君子と仰がるゝも、靈性の知見が啓示されざる間は、宗教より見れば未だ盲目たるを免れず。理性の銳利なる輩は己が靈性の盲目たるを自覺せず、自負して己れ智ありと謂ひ靈魂は滅とか不滅とか、人生の歸趣は甚變に在りとか、斯の如きの種々の見解即ち身見邊見邪見執見戒禁取見などに陥りて、彼等は未だ靈性開けず、唯理性を以て推理を下すが爲に謬見を生ず。靈界の消息は理性を以て窺ふことを許さず。世に己が靈の眼なきを自覺せずして、佛身、佛土の存在を疑ふのみならず、還てこの存在を認めず等と主張するものあり。實に惑むべき徒なりと云ふべし。

爰に我祖は、曾ては一代の經教にも精通し、智慧第一の譽を荷ひしにも拘はらず、彌陀の前には「我は愚痴の法然房黑白をも辨へざる癡漢と選ぶ所なし。唯念佛して彌陀を頼むより外なし」との儂りなき告白は、彌陀の容る處と爲つて、いつか知見の眼を開き給ふ。あみだ佛と申すばかりをつとめて、淨土の莊嚴見るぞ嬉しき」とは正しく其證として信すべし。

扱、佛知見開示とは、何れ靈界を知見することなるも、唯佛身佛土等を觀見するのみなるか、將た其他に悟入することありやとの間に答へて。知見開きて所觀の方面は幾干かある。先づ三種を擧ぐれば、一感覺的、二説話的、三理想的。初の感覺的知見とは佛の相好、光明、又淨土の莊嚴を觀見する等、または管笛の聲即ち天籟の音を聞く如き、或は種々の妙香芬烈として量りなきを感じ、又は舌根に於て世に比類なき妙味を感じ、または寒風屑を翳く嚴冬の折に、柔軟なる兜羅綿を以て身を覆はるゝを感ずるが如き、是等は感覺的知見なり。次に説話的とは、例を云はゞ善導大師入定して百餘尺の佛身を見る。告て曰く「樹を伐らんには切に斧を下せ。縁なきには共に語る」と勿れ。家に還らんには苦を辭すること莫れと、又汝が師の道綽に三罪あり、宜しく懺悔せしめよ云云の如きは、説話的にして、次に理想的とは禪の見性の如き本地の風光又は天地一體の如き、尙廣くは三昧を得て諸の神通、智慧、總持を得る等なり。

隋の智者大師、法華三昧に入て、靈山に於て釋尊法華説法の會座に列なるを觀見し、後、旋陀羅尼を得て辨才無礙を得たりと。

基督教にて聖靈を感じ、また默示を被むると云も、佛教のそれとは廣狹ありと雖も同一なるを信す。

佛教の諸の大乗經は、概して釋尊が三昧定に入りて、經驗されたる相狀の説明なりと云も或は然らん。由之觀此、大乘佛教は悉く彌陀の智慧光が釋尊の心に映じて、佛境界の消息を説教されたりと云に歸すべし。此段に至つても古今の高僧中に宗祖の如き造詣の深きは又有らじ。开は元享釋書等を披覽せば明らかなり。是れ宗祖の髓なり。若し前の三昧發得して淨土の莊嚴を觀見するを以て心の華とせば、無生法忍を得、また彌陀の相好等の觀見のみに非ず、宗祖の人格の核としては、或は暗夜に身より光を放ち、或は頭光を現じ、橋上地より一尺を隔て、歩行なさる如きは、髓に以て靈格の餘光に外ならずと云ふべし。

(ト) 道德的に靈化する意志 人格を形成する筋骨と爲るものは、精神中の意志なり。精神生活の中心なる感情、我が温かな豊富なる血や肉の如きものを以て生活しつゝあるは、これ筋骨の力なりと雖も、意志其ものが健全に緊張して氣張らざれば生存の煩悩に耐ふべからず。感情我も我なれども、尙一層固き人格の柱と爲る意志を鞏固にせざるべからず。意志は力にして、人格の外部に於ける働はこの作用なり。されば人間も精神の進化したる動物なれば動物性の我に活きんとする氣力を根本となす。然し同じ活きんとするには唯動物的に活きんと欲するのみにあらず。進んで理性の意志として活きんとすれば、常識を有し、人格を具備するを以て高等の生活と云ふべし。尙進んで靈我と永遠の生命を基礎として活きんと欲するに至りて、始めて完全なる人間生活と云ふべし。想ふに人の意の善と惡とに分るゝは、意志の方向が何れかに有るなり。肉慾や我慾を目的とし、我あるを知り、他人の迷惑を顧みざる如きは惡の作用なり。佛教には人格の核を爲す所の意向を十界に分類して、迷と悟と善と惡とを本とし

十部の階級的に區別す。

人の意思の水は、滔々として不斷に持續して、我意の欲する方向に流れつゝ働く。若しは惡き方、若しは善き方、遂に永く持續する時は之が習慣となる。既に地獄の性格と固定せし神識は、他より見れば恐ろしい惡業なれども、本人は平氣にて敢行す。我々の意が地獄とも餓鬼とも、又は人間天上、進んでは菩薩の靈格とも爲るは、喻へば果物の實が、甘きに酸味に、各自の持前に熟する如く、人の意志の働きは、自己の性格を形成しつゝあるなり。

前に演べたる如きは、世に賢人偉人と稱せらるゝ方も、理性の域に位置を定めたる人は、偉人と云はるゝも、佛教より云はしむれば人天の範圍に道德を説き、人格を形成するに過ぎざるべし。

我日本國民に心靈界の光明を宣傳して、道俗を通じて、大慈光明に攝して靈の生命とし、しらすく、聖き人格の核を爲さしむる宗教を開かれしは、唯我祖のみなりとす。

一切を攝取して平等に淨化する光明は、喻へば太陽の光の如くに照しつゝあり。若し人此光明と自己の意志とを結合すれば、無限の靈力は、常に人の意志に流れて其意志を靈化す。然れ共如斯靈光は、肉眼を以て發見する能はず。

衆生をして此光明に接觸する方法は即ち光明名號なり。口に稱へる如く意にも憶念すれば、不斷の靈力に感應して意志を靈化す。從來の罪惡我を脱して、聖我と爲らんには、不斷の意志を要す。不斷の靈光に浴し、日に新たに亦日々新たに、不斷の改革不斷の努力を要するなり。人間一日一夜に八億四千の念あり。念々の中の所作皆是三途の業なり」と。我等若し如來の不斷光と離るれば、實に然り。無明妄動の起す所の業は、悉く三惡ならざるはなし。若し之を轉じて彌陀の不斷光を我意志に接續せば、彌陀の靈電我が意思に傳はりて、或は燈明と爲り、或は温熱と爲り、器械運轉の力と爲り、我等は三業の所作をして、快活に勇氣を鼓舞して、聖意に叶ふ働きを爲すことを得べし。

釋尊が成道の曉より臨終の夕に至る迄、不屈不撓不斷の衆生濟度の努力は、彌陀不斷光の人格現に外ならず。我祖の人格に結びたる核は、日本の釋迦として不斷の活動三業の所作、悉く彌陀不斷光の實現ならざるはなし。

みおやの全き如く、全き人格を以て一切を化す。抑も是れ彌陀に靈化したる人格にあらざれば斯の如く全きを得んや。

宗祖の靈的人格の全きを以て、彌陀の實在を證して除あり。喩へば太陽のエネルギーが、米を實らしむる能力あるや否やは、唯太陽の光のみを見て證明すること能はざれども、田地に稻種を播下して萌發せしめ、苗が成長して實を結び、米と爲りしを見て太陽の力を被らざれば、いかに稻實を收穫することを得むやと思ふ。彌陀の光明が人の心靈を養成するに於ても又然り。衆生の心地に名號の佛種子を播下し、常に彌陀の慈光を被らば、其收穫は各自の靈的人格として現はれん。宗祖を模範として、彌陀の光明能く人を復活するの力あることを證すべし。

尙各自々に結成したる人格を以て、靈の存在を證明せんことを、切に希望して止まざる處なり。

(道詠十首の内七首は既に講演せり。残る所の三首は佛祖より機會を與へらるゝ日を以て完結せんとす。)

大正十五年七月廿五日印刷
同 廿五日發行

誌代年七冊一圓二十錢(郵稅共)
年十二冊二圓(郵稅共)

編輯兼 山崎 辨成
發行人

東京市小石川區茗荷谷町九八
印刷人 小林 七太郎

發行所 東京市小石川區水道端二ノ四四
ミオヤのひかり社

編發東京六八五一番